S O T O 禅 インターナショナル

発行日　2002年１月15日
発行人　藤川享胤　　編集責任者　浅井宣亮　　編集委員　秋　太田　金子　菅原　舘盛
発行所　SOTO禅インターナショナル事務局　〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6
Tel.03-3361-0614　Fax.03-3361-0634　　URL:http://www.pa.airnet.ne.jp/szi
郵便振替　00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.20

講演前に紫雲台拝問をする杉原幸子夫人

CONTENTS

●巻頭　祈りと願いをこめて ……大本山總持寺　貫首　板橋興宗…… 1
●特集　杉原千畝夫人講演会「六千人の命のビザ」 ……SZI事務局　金子宗元…… 2
第３回「ゆめ観音 in 大船」アジアまつり速報 ……SZI事務局　舘盛寛行…… 4
●特集　ＳＺＩからの提言　アメリカ合衆国同時多発テロ事件に寄せて
アメリカ合衆国同時多発テロ事件に寄せて　アラスカより ……アンカレッジ禅コミュニティー堂長　秋山洞禅…… 6
北アメリカ開教師寄稿……北アメリカ開教師（ロサンゼルス禅宗寺）　小島秀明…… 8
９月11日、その日ハワイでは……ハワイ開教師（マウイ満徳寺）　大谷有為… １１
西暦2001年９月11日……SZI事務局　秋　央文… １２
●大遠忌レポート　アジア仏教徒フォーラム ……東京外国語大学大学院　泉　経武… １４
アジア子ども文化祭……SZI事務局　飯島尚之… １６
●海外レポート　アメリカの仏教書“ZEN MIND BEGINNING'S MIND” ……ヴァレー禅堂　堂長　藤田一照… １８
別天地に移住して新しい人生を始めるまで（下） ……SZI会員　出川成海… ２０
オランダ・フランス禅道場レポート ……福井市松雲院　住職　小野義彦… ２２
●ＳＺＩスタッフ論集 …… ２３
●夏期大学報告……SZI事務局　浅井宣亮… ３０
●ＳＺＩ動静報告 …… ３０
●会費納入者・寄付者リスト …… ３１

巻　頭

祈りと願いをこめて

大本山總持寺　貫首　　**板　橋　興　宗**

アメリカでの同時多発テロは、世界の人々を震撼させた。多くの人命が失われ、多くの人々が負傷されたことは、誠に遺憾に思う。亡くなられた方々へのご冥福を心からお祈りする。テロという卑劣な行為によって尊い命を奪うことを神様が命ずるはずはない。ジハード（聖戦）の名において、人を殺すと言うことは断じて許してはいけない。歴史の教訓の中で、争いが神の意志でなく、人間の業であることは証明されている。

仏教は、因果を教えの基本にしている。それは原因を問うて、再び災いを招かぬための教えであり、その原因を人間の心に置くことはもちろんである。テロとは犯罪である。その犯罪に対して罰を与えるのは当然であり、罰は社会の平安を保つために必要なことである。しかし、その罰が報復であってはならない。空爆でアフガニスタンの罪のない人々が死傷しているニュースをみるたびに心が痛む。仏教者として、恨みに恨みを以て報復することは、また新しい恨みを生むことになることを知るべきである。

十重禁戒の第一に「不殺生戒」が示されている。いかなる宗教でも、いのちの尊さを説いているはずである。「殺すことなかれ」ということは殺さないということと同時に殺すことも認めない、殺させないということである。

21世紀は文明の衝突の時代だと言われている。宗教と民族とが複雑に絡み合い、怨みが怨みをよび、殺戮が繰り返される今日、お釈迦様の非暴力、不殺生の教えに耳を傾けよう。そして怨念を祈りに替え、懺悔と本当の信仰に向かわせしめるよう努力をしなければならない。

特集／總持寺ワークショップダイジェスト

六千人の命のビザ　－運命の50日間－「日本のシンドラー」杉原千畝夫人講演会

ＳＺＩ事務局　金　子　宗　元

杉原千畝氏

杉原幸子夫人

はじめに　～企画趣旨～

西暦2000年は、日本曹洞宗の開祖道元禅師の御生誕800周年であるとともに、「日本のシンドラー」故杉原千畝氏の生誕100周年にもあたる年であった。それ故、昨年度来、明石康氏（元国連事務次長）を委員長とする「杉原千畝生誕100周年記念事業委員会」等を中心として、各地で記念事業が開催されてきた。

故杉原千畝氏は、第二次世界大戦中、リトアニア領事代理を務めていた際に、ナチスドイツの迫害から行き場を失ったユダヤ人難民に対し、当時の日本政府の意向に反して、自らの判断で通過ビザ（査証）を発給し、約6000人のユダヤ人の命を救ったことから、その人道主義、博愛精神に満ちた功績が、国際的に高く評価されている人物である。

この杉原氏の行為は、仏教等の普遍宗教に於ける「慈悲」や、特に大乗仏教、そして曹洞宗に於いて重要視される「利他行」・「自未得度先度他」の精神等、仏教のエッセンスを凝縮し、具現化したものと表現しても過言ではないものである。特に、本国の意向に逆らい、ナチスドイツによるホロコーストに反対するかたちで、ユダヤ人難民を救済した立場は、今日に於ける国際的な課題とも言うべき「人権」的見地に於いても、極めて高く評価されるべきものである。

こうした観点から、故杉原千畝氏の功績を再確認し、そして広く世に顕彰することは、「人権・平和・環境」を布教教化方針に立て、その細項目の中では「あらゆる差別の撤廃」、「世界平和の実現」を明文化している曹洞宗に於いては、極めて意義深い事である。更に当日の聴衆に含まれる大本山總持寺の修行僧をはじめ、海外開教を志す宗侶達にとっては、異文化の地で、自らの将来を擲ってまで、人道・博愛主義を貫いた人物を、より深く知る機会となり、また、仏教徒以外の一般参加者や外国籍の参加者等に対しては、仏教のエッセンスを、深遠な仏教用語を用いること無く、かつ感銘的に伝えることが可能であろうかと思われる。

以上の様な判断から、2001年度SZIワークショップとして、故杉原千畝氏の功績を取り上げることとなった。

SZIワークショップ初の試み

今回、SZIワークショップとしては初の試みとなる企画を、二つ導入した。

その一つ目は、大本山總持寺、三松閣四階大講堂に於ける講演会に於いて、講師としてお招きする杉原幸子氏の御講演に先立ち、千畝氏の功績を簡潔に紹介する、約15分間の短編ドラマ形式のビデオ（杉原幸子夫人・杉原美智氏にご用意頂いたもの）を上映したことである。

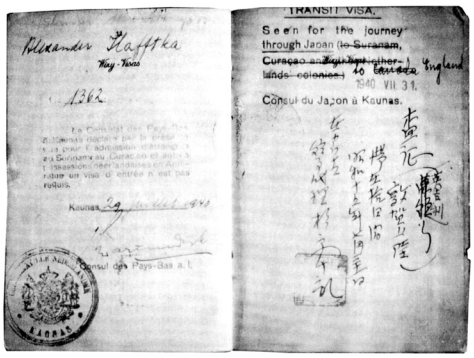
また二つ目は、鶴見大学（学校法人総持学園）の御後援を仰ぎ、JR鶴見駅西口に程近い鶴見大学会館一階のセンタープラザをお貸し頂き、先行開催としてパネル展示会を開催したことである。

これらの新しい試みの狙いは、講演会場の大本山總持寺の近辺に、幼稚園から大学に至るまで、非常に若い世代が通学する教育機関が存在することから、そうした戦争を体験していない若い世代の方々に、戦争とはどの様なものであったのか、戦時下のリトアニア近辺のユダヤ人達がどの様な迫害をうけていたのか、またそうした状況下で千畝氏が断行した行為の意義を、少しでもわかりやすく理解してもらう事にあった。

パネル展示会の開催

先行開催となったパネル展示会は、6月25日（月曜）から29日（金曜）迄の五日間にわたり、鶴見大学会館一階のセンタープラザを会場として開催した。午前10時から午後4時頃まで、SZIから二名のスタッフが連日常駐し、展示パネル等に関する来場者からの質問にお答えしたり、非営利目的（売上金は杉原千畝記念基金へ全額寄付）での杉原千畝関連書籍の販売、あわせてSZIの活動紹介などにつとめた。

展示したパネルは、杉原幸子夫人・杉原美智氏の御配慮で、額縁・キャプション付きの形でお貸し頂くことが出来たが、それを更に、内容上、以下の六群に分類して掲示した。



ユダヤ人への直筆ビザ

- "命のビザ"の発給（14枚）
- ビザ発給の背景（6枚）
- ユダヤ避難民に親切だった日本の人々（2枚）
- 杉原千畝の生い立ち（12枚）
- 辞職勧告（2枚）
- 杉原千畝の顕彰（14枚）

また、会場としてお借りした鶴見大学会館センタープラザには、巨大なディスプレイ装置があることから、鶴見大学側の御厚意で、先述のビデオを、パネル展示会場に於いても、常に繰り返し上映して頂くことが出来た。

丁度、月曜日の朝日新聞夕刊に、今回のワークショップの告知文が掲載されたこともあってか、二日目頃より連日にわたり非常に多くの来場者をお迎えすることが出来、パネルの内容、特に千畝氏直筆のビザの写真の中の記述内容に関して質問を下さる方や、何故、ナチスは、ユダヤ人を迫害しなければならなかったのか？　東京裁判で千畝氏に関する事柄が何故公表されなかったのか？　…等々、非常に内容の濃い質問を下さる方々、リトアニアの領事館跡をも御覧になられたことがあるという御夫妻、子供に千畝氏の絵本を読ませて育てたという御家族がお越しになる等、常駐していたSZIスタッフにとっても、様々な意味で学ぶこと多き、非常に有意義な展示会となった。

總持寺講演会

6月30日（土曜）には、大本山總持寺三松閣四階大講堂にて講演会を開催した。約500人もの聴衆が大講堂を埋め尽くした。

午後2時の開会の辞に引き続き、大本山總持寺貫首板橋興宗大禅師猊下御親修のもと、本山大衆の御随喜を得て、開講式法要・開教師示寂者・戦没者法要が執り行われ、引き続き御垂辞を賜った。続いて、SZI滝澤副会長の主催者側挨拶を経て、千畝氏の生い立ちからその功績を紹介した約15分間のビデオ上映が為された。場内の照明を落としたこともあってか、ビデオが終了し、再び照明が点灯されると、既に涙を流されていた方も見受けられた。

続いて御講演頂いた杉原幸子氏のお話は、千畝氏との出逢いから、リトアニアの領事館前にユダヤ人達が詰め掛け、ビザ発給を訴えた時の生々しい状況。この光景を目の当たりにした当時五歳であった長男弘樹氏と幸子氏の想い。ビザ発給の決断を下すに至るまでの、様々な千畝氏の葛藤。当時、日独防共協定を結んでいた本国政府から最初の回訓を受理した際に、一晩中眠ることも出来ずに、苦慮、煩悶した様。ビザを発給することがもたらすであろう、文官服務規程違反・昇進停止・馘首といった、千畝氏の将来を擲っての決断の際に、唯一の相談相手であった幸子夫人の想い等、当時の千畝氏の苦悩と英断の、その息遣いが伝わるかの様な熱のこもった御講演となった。

更に幸子氏は、戦時下という状況が生みだした悲劇の一方で、ドイツ人将校が、自らの身体を楯にし、幸子夫人を覆い、敵の銃弾から命を助けてくれたエピソードなども交えてお話しになられる等、人間の尊厳性を力説なさり、「人間として当たり前のことなのだけれど、人間はその当たり前のことがなかなか出来ない。それを思い切ってやることが、大切なことだと思う」ということを、あたかも口癖の様に仰られ、最後の段では、子供の生活環境に於ける家族の団らん等の重要性や、人間がお互いにお互いの痛みを知り合い、お互いに慰め合う、そうした社会を熱望して止まないという幸子夫人の熱弁で、幕を閉じた。

おわりに

今回のパネル展示会に於ける来場者の方々から寄せられた質問、そして御講演終了と共に受け付けた質疑応答は、実に忌憚のないものばかりであったが、最も多かったものは、「どうしてナチスはユダヤ人を殊更に迫害しなければならなかったのか？」「何故、人権が侵される状況が生まれるのか？」「何故、差別が生まれるのか？」といった、来場者の心の中に自発的に芽生えた根本的な問い掛けである。

千畝氏の、人道・博愛精神第一という見地からの決断や、「自未得度先度他」の精神が貫かれた行為が、こうした根本的な問い掛けに対する熟慮を通して為されたものであることを考えるならば、ここに、今回のワークショップによって結実した成果を見出すことが出来るであろう。

杉原幸子夫人講演

速　報

第３回「ゆめ観音 in 大船」アジアまつり

～ つながる　ひろがる　アジアのねがい ～

ＳＺＩ事務局　　舘　盛　寛　行

2001年11月24日、神奈川県鎌倉市の大船観音寺において第３回「ゆめ観音in大船」アジアまつりが開催されました。当日は晴天に恵まれ、昨年の２倍である2000人の方々がこのアジアまつりに訪れました。

このアジアまつりは「つながる　ひろがる　アジアのねがい」が示すように、アジア各国の方々との交流を深め合いながら、その輪を広げ、同じ人間として、同じ「いのち」として、共に世界の平和を願う集いです。本年も大船の街を見下ろす白衣観音像の前に設けられたステージでは、曹洞宗大本山總持寺監院渡辺剛毅老師による平和祈願法要をはじめ、スリランカ僧侶、台湾僧侶、チベット僧侶による法要、法話が行われました。同時に、村上功氏、高田淳氏、井上智彦氏の和太鼓演奏や地元鎌倉のお囃子、またインド、韓国、朝鮮、台湾、チベット、カンボジア、バリの舞踏も平和の願いと共に奉納されました。また、境内ではインド、ベトナム、タイ、韓国、ネパールなどの料理や伝統工芸の出店もあり、訪れた人々がアジア各国の文化に直接触れ、和やかに交流する姿も見ることができました。

特に今年はアメリカでの同時多発テロ、アフガニスタンでの戦争という悲しい出来事が起こっています。境内に設置されたアフガニスタンの現状の写真やレポートには多くの人々が足を止め、深い悲しみと共に平和への願いを深めていました。

仏教では人間だけでなく、全ての生物が同じ「いのち」であり、平等であると説きます。「いのち」の視点で見れば、国境もなく、人種もない同じ人間なのです。また、人間だけでなく動物も植物もこの地球上に生きている同じ「いのち」なのです。「私だけ」「我が国だけ」「我が人種だけ」「我が宗教だけ」という心を捨て、同じ人間として、同じ「いのち」としてお互いを理解し、そして協力し共生する心を養うことこそ、これからの私たちに必要なものなのではないでしょうか。その願いがこれからもこの大船の地から発信され、全世界に広がることを祈りつつ報告とさせていただきます。

開催趣旨

大船観音は鎌倉市内にありながら、いわゆる観光地としての鎌倉エリアから外れた位置にあります。そのため、拝観者数は鎌倉駅周辺の寺社の10分の１にも満たない状況です。しかし、拝観者のうち６割は篤い観音信仰の方々であり、幾度となくお参りをされております。また、境内に掲げられた絵馬や参拝ノートには、アジア各国の文字が目立つことも特色です。そこには健康を祈る言葉のほか「経済的に苦しい」「愛情が欲しい」など様々な願いが書き記されています。

在日アジア諸国の人々は、それぞれの悩み、思い、願い事を胸に観音様へと参拝を重ねているのです。いわば日本で暮らすアジアの方々の心のよりどころとなっているといえます。そこで、観音信仰で結ばれたアジア各国ゆかりの僧侶をお招きし、それぞれの国の様式で平和の祈りをささげ、音楽や舞踊を催し、ひとときでも楽しい時間を過ごしていただく場を設けることが出来ないだろうかということで企画されたのが「ゆめ観音」でした。

大船観音寺境内の白衣観音像は、もともと観音信仰の普及とともに世界の恒久平和を祈願して建立されたものです。また、境内には原爆の火が燈されています。平和の願いを日本からアジア各国へ、そして世界へと広げていきたい。「ゆめ観音」アジアまつりでは大船の街を見下ろす白衣観音像の前にステージを設け、観音様に向かって平和の祈りをささげ、また観音様に抱かれながら民族芸能を奉納します。また、境内では各国僧侶が身の上相談に応じ、民族相互の交流も図ります。

詳細はSZIホームページhttp://www.pa.airnet.ne.jp/szi/yume/をご覧下さい。
また、会員の方々のご意見・ご感想もお待ちしております。

SZIからの提言

9/11 アメリカ合衆国同時多発テロ事件に寄せて

米国同時多発テロ事件に寄せて

アラスカより

アンカレッジ
禅コミュニティー堂長
秋　山　洞　禅

オウム真理教の地下鉄サリン事件以来、あるいはそれ以前から心配されていたテロ事件が、思いもよらぬ形で、世界の首都とでもいうべきニューヨークのマンハッタンその他で同時発生し、世界中を震駭させた。この事件では日本のマスコミも大騒ぎしたらしいから、不十分な英語力で現地のテレビや新聞、雑誌簿を見たり、読んだりしなくてはならない我々在米の日本人より、日本に住む方々のほうが、はるかに多くの情報を得られているのではないかと思う。私は現在、アンカレッジ・ゼン・コミュニティーで週六日坐禅をし、アラスカ大学アンカレッジ校で週一度、二時間の坐禅クラスを担当しているので、その両者に関連した報告をさせていただきたいと思う。

9月11日以後、ゼン・コミュニティーでも大学でも、事件で話題がもちきりになったのは当然であり、私も、仏教は今回の事件をどうみるかと、何人かの人から質問された。こんな言い方をしたらお怒りを受けそうだが、社会問題に疎い典型的な仏教僧侶の一人として、何と答えたらよいか困ったというのが本音である。しかし、そんなことで済ませられる事態ではない。しかも、仏教僧は浄土真宗のベルギー人僧侶と私しかいない当市で、いい加減な発言をすることはできない。慌てていろいろな資料を調べ、日ごろ考えていたことを整理して、「仏教一般の見方というものはなく、これはあくまで一人の禅僧としての、私の個人的な見解である」とのことわりの下で、大学とゼン・コミュニティーで、次のような話しをした.

1　事件の犠牲者とその家族、親族、友人の方々に対し、心から、お見舞いとお悔やみを申し上げたい。
2　いかなる考えや信念に基づいた行為であろうと、このような行為を是認することは絶対にできない。関係者は法に基づいて、厳重に罰せられるべきである。
3　しかし・仏教の『法句経』に「憎しみによりて憎しみは静まることなし、憎しみは愛によりて静まる。これ永遠の真理である(英語からの重訳)」、日本語訳では「まこと、怨みごころは　いかなるすべをもつとも　怨みを懐くその日まで　ひとの世にはやみがたし　うらみなきによりてのみ　うらみはついに消ゆるべし　こは易らざる真理なり」とあるように、相手を憎んで報復したりしても、報復の報復、そのまた報復という形で争いが尽きないことは、中近東や東欧諸国の例を見ても明らかである。必要なことは報復ではなく、原因をつきとめ、その原因をなくすことだと思う。
4　仏教は世界でも最も寛容、平和な宗教の一つで、日本の仏教学者、長尾雅人教授は「仏教は自分の立場を正しいと信じながら、同時に他の立場も認めるといういき方で、仏教そのものが火種になって起こった戦争というものは、歴史上ないように思われる」と言われている。
5　テロ事件を起こした人達はもちろん、アメリカ人も、世界にはいろいろな習慣や文化を持った人達がいることを認識し、自分達とは異なった考えにも寛容でなければならない。アメリカには素晴らしい面がたくさんあり、だからこそ、私を含め、多くの人達が世界中から集まってくるのだが、アメリカ政府はとかく、自分達は絶対に正しいと信じ、その価値観を世界に押し付けがちである。そのような態度を取り続けるかぎり、今回のような事件はなくならないだろう。もちろん、この事件の結果、特定の人種や宗教の信者を差別したり、虐待するようなことがあってはならない。
6　私は僧侶であり・政治的な発言はなるべく控えたいと思うが、京都議定書、ミサイル防衛構想・弾道弾迎撃ミサイル制限条約、生物兵器禁止条約、世界人種差別撤廃会議その他の国際的な諸問題に関連した、ブッシュ大統顧の孤立的、独断的ないき方は、世界平和にとって非常に危険だと思う。
7　生物はその長所によって栄え、長所によって滅びてきたと聞いたことがある。人類もその長所である頭によって世界を支配するようになったが、核兵器、生物・化学兵器・遺伝子操作等、その頭によって滅びる道を突き進んでいるように私には思われてならない。

以上の発言に対し、それでは、アメリカは今後どうすべきかと聞かれ、さらに、政治問題に言及せざるを得なくなった。

1　事件の黒幕や関係者をつきとめ逮捕するように努めるのは当然だが、そのために特定国を攻撃したら、さらに多くの尊い生命が失われるのはもちろん、それによって一番の被害を受けるのは無実、無力の市民、特に、女性、子供、老人である。さらに、世界情勢はきわめて複雑で、そのような攻撃は、争いの一層の深刻化と多様化を招くことになるだろう。
2　事件後は、今までアメリカに非協力的ないしは敵対的であった中国、イラン、キューバまで今回の行為を非難し、アメリカに同情の意志を示しているほ

どだから、世界中の政府、民間の声を盛り上げてテロリストを孤立させ、彼らが二度と行動できなくなるような世論を作り上げていくことが、最良の対処法ではないか。また、そうした過程を通じて、これまで対立的であった国々がより緊密に接触・協力し合うようになれば、それに越したことはない。

3　長期的には、テロ行為のもとになる反米感情がどうして世界各地に絶えないかを根本的に研究し、改めるべき点があれば改め、争いのない世界を作るイニシアチブをとるのが、世界で唯一の超大国である米国の役目だと思う。

このように述べた後、学生やメンバーに話し合ってもらったところ、大学では発言者のすべて、ゼン・コミュニティーでは、一人の女性と米軍基地に勤める一人の男性を除き、全員が平和的解決を望むということだった。アメリカ人はみな率直に意見を言うと考えがちだが、私の限られた経験とはいえ、必ずしもそうとは考えられないので、翌週、無記名で、特に軍事行動に関する賛否を中心に、本件に関する意見を書いてもらったところ、結果は前回と同じであった。

大学では、いかなる国への攻撃にも賛成する意見は皆無。ゼン・コミュニティーのほうは、軍事行動に賛成する意見が2、それ以外はみな反対だった。軍事行動以外では、私の指摘した点について同じような考えを述べたものがほとんどで、特に目立つ意見はなかった。

私の考えがどの程度彼らに影響を与えたかは不明であるが、当時は事件直後で、アメリカがいまにもアフガニスタンや、ことによるとイラクその他の国々まで攻撃しそうな緊迫した情勢にあり、世論調査で、米国民の80％が報復を望み、70％が米兵に多数の死傷者がでる可能性があっても報復すべきだと答え、一般市民が犠牲になるようなことになっても報復すべきだと答える人も70％近くという雰囲気の中で、上述のような結果を得たことは非常な驚きであった。

その後、米国政府内でも穏健派が強硬派を抑えたためか軍事行動が控えられていたが、米国時間で10月７日に、とうとうアフガニスタン攻撃が始まった。一方で、ブッシュ大統領は国際協力にも従来より力を入れはじめたようにみえる。しかし、目先の都合で政策を決め、あるいは変えるだけでは、恒久的な世界平和に寄与することができず、テロの脅威が消えるとも思われない。露骨な「国益」優先の政策ではなく、真に人類全体の将来を見すえた政策が必要だと思う。

と、ここまで書いたところで、宇多田ヒカルが自分のホームページから発したというメッセージを、知人から受け取った。日本の新聞にも載ったらしいので、読まれた方も多いと思う。題は『生きてます!!!』

一人の子供が深く傷ついて、泣いているところを見ると、なんだか「人類」っていうもの全部が泣いてるような気がするのね。そして全人類でその子を守ってあげなきゃいけないような気がするの。…だから９月11日に起きた突然のテロ攻撃をアメリカだけではなく、「全人類に対する攻撃」だっていうアメリカ政府の気持ちってちょっと分かる。でもね、今この瞬間にも行われているアメリカによる報復の爆弾も、「テロに対する戦争」だって言ってるけど、どうしてもそれもまた全人類に対する攻撃のようにしか思えないの。だってどこかでその子がもっと泣いてるような気がするんだもん。21世紀が泣いてる……国民の怒りをあおる政府もメディアも、身近にいる外国人に仕返しをする人達も、テロ撲滅に参加するって言っている政治家も、5ドルのちっちゃなアメリカの旗を自分の車に飾ってるアメリカ人も、電車で隣りの席にアラブ人っぽい人が座って少しでも「やだな」って思う日本人も、みんな自分を痛めつけてるだけで、すごく悲しい…。

いたずらに六十余年の馬齢を重ねた禅僧のくどくどした駄文より、十八歳の女性歌手の話し言葉のほうが、はるかに人の心に訴えるものがあり、恥ずかしい限りである。

今回の事件に限らず、世界中で悩み、苦しんでいる人達のことを考えると、本当に心が痛む。無能の私にできることなどたかが知れているが、せめて、この世から悩み、苦しみが少しでもなくなることを願いつつ、米国の一隅に小さな坐禅の輪を広げるよう、今後も努めたいと思っている。

偉そうなことをいろいろ書き連ねた失礼を、衷心よりお詫び申し上げます。本紙の編集部から原稿を依頼された際、私は適任ではないのでとお断りしたのですが、そこをどうしてもと重ねて頼まれ、しぶしぶ筆を取ったというのが実状です。皆様からのご批判は、十分覚悟の上であります。合掌

マンハッタン島

北アメリカ開教師寄稿

同時多発テロの朝

北アメリカ開教師
ロサンゼルス禅宗寺
小　島　秀　明

その日、寝所の中から這い出ようとして電話が鳴りました。電話は日本からで、受話器の向こうで教化研修所時代からの恩師が「大変なことになったがそちらは大丈夫か？」という此方の身を案じての電話でした。当の私の方は「はあ？」と寝耳に水で、窓の外のヤシの葉がいつもと変わらず平和にそよいでいるのを確かめていました。9月11日朝6時30分（ロス時間）。恩師の説明でようやく「大変なことになった」ことの意味が寝起きの脳みその中で形を持ちました。テレビをつけると世界貿易センターが煙を吐いています。ペンタゴンも燃えています。テレビの解説で現在までに起ったことは判りました。しかし以前として全容が判然としません。これから更に恐ろしいことが起るのか、今自分たちがどういう状況に置かれているのかがはっきりしないのです。しかし、とりあえずいつもの朝と同じように一日の生活をすすめていかなければなりません。支度をし、子どもたちを学校へ送ります、娘の通う小学校はいつもと同じように校門を開けて生徒を吸い込んでいます。学校がやっているのだから大丈夫だな、などと想いながら、そのままお寺に向かいます。車内のラジオはひっきりなしにこの事件を報道しています。高速道路で約一時間の混雑した道のりはいつもと変わりません。ただ、上空だけは静かです。いつもなら空もラッシュで何機もの飛行機が行き交っているのですが、今日はたまにヘリコプターが一直線に飛んでいくだけです。秋葉総監が11時にオークランドから飛行機で帰山する予定になっていたのですが、この分じゃ駄目かなと考えたりします。

今日の幹部会やお寺のアクティビティーなどの予定をどうするかが頭の中を巡ります。ロスのダウンタウンに入ると高層ビルの周辺がブロックされていましたが、禅宗寺は位置的に中心部からは北東に離れていてほとんど影響がありません。8時30分禅宗寺に到着。こうして非日常の一日が日常的に始まったのでした。

午前10時を過ぎるといつもの火曜日と同じようにボランティアの方たちが集まってきました。ただ違っていたのは、いつもの明るい「Good Morning!」ではなくて、「大変なことになりましたね」という言葉がみんな最初の挨拶のように口から出てくることでした。午前中はいつもの火曜日に行われているのと同じようにそれぞれの仕事に向かっていました。後から入ってくる人は、ラジオやテレビで得た最新の情報を携えてきました。お昼にはボランティアさんが作ってくれた食事をみんなで食べます。専ら話題はこの事件です。

ほとんどの方が、「パールハーバー以来の」とか「カミカゼ・アタック」という言葉がニュースで頻繁に使われている事に対して嫌悪感を感じていました。と同時にパールハーバーが起った日のことも思い出していました。戒厳令がしかれ、街の出口を憲兵が閉ざしていたとか、遠くに葬儀ができて、そこにお参りに行くのに許可証をもらって行ったとか、その日のうちにFBIが来て父親を連れていったなどの話です。

今回は母国日本が関わっていないだけで、同じ状況がまた起こるのではないかという心配も多少ありました。この時にはまだ、事件の全体像すらわからず、戦争になるのか、犠牲者の数がどのくらいに成るのか、戒厳令が敷かれるのか、それともそんなたいしたことには成らないのか、何もわかっていなかったのです。ただ、惨劇に対する悲しみと、テロリストに対する怒り、次に何が起こるかへの不安があるだけでした。結局この日は、みんな平静を装いながらも緊張した普通の一日を過ごしました。

デマも飛び交いました。「乗っ取られた飛行機は11機、その内何機かがロスに向かっている。」あとからコレは日本のメディアが流した誤報だとわかるまでだいぶ時間がかかりました。しかし、ニューヨークに次ぐ全米第二の都市ロサンゼルスだけに、狙われて当然という緊張がありますから、アメリカのメディアがパニックを避けるために事実を隠している、と騒ぐ人もありました。みんないつもと同じ顔をしていますが未知の不安とショックを抱えていました。

大事をとって、子どものアクティビティーは中止、幹部会も延期となりました。総監の帰山も飛行機が飛ばないのでどうしようもありません。翌日からのサンフランシスコでの会議も中止になりました。

ですが、ニューヨーク、ワシントンがある東海岸から大陸の反対側のこのロサンゼルスでは、日常生活そのものへの影響はこの日、肌身では感じられませんでした。しかし、翌日から真綿で首を締められるようにじわじわとそれが現れてきたのでした。

■「祈りと追悼の日」

翌日から街のあちこちに弔意を表す半旗が掲げられました。このときの国民感情は何千人もの命の損失に対する深い悲しみにつつまれていました。空港は閉鎖され、

官庁は閉ざされたままでしたが。しかし他はいつも通り人が歩き、食べ、仕事をし、生活しています。禅宗寺も平常通りでした。

翌々日の14日が犠牲者を悼む「祈りと追悼の日」と定められ、あちこちで集会やミサが行われました。私たち家族が住むコンドミニアム（日本でいうマンション）の前でも集まりがあり、私たち一家も火を灯したキャンドルを携えて、輪に加わりました。集まってきた人たちの顔はキャンドルに照らされ、誰から歌いだすともなく愛国歌が歌われ、自然に合唱となってゆきました。脇を走り抜ける車も、そばに来るとクラクションを鳴らし共感の情を表して去っていきます。それにまた呼応するように人々は手に持った星条旗を振り車を見送っていました。様々な人種の顔がありました。隣人のイタリア人やフランス人の顔も見えるし黒人やメキシコ系の人も、みんな等しく、多くの命の損失への悲しみを共有できたことに私は感動を覚えていました。

そのあと私たち一家は散歩がてら目抜き通りの方へ歩いてみました。街の辻々で、同じような集会が開かれています。しかし、夜が更けていくにしたがって様相が変わってきました。車のクラクションはだんだん煩いほどに高らかと鳴らされ、車窓から体を乗り出して大きな星条旗を振っている。そんな車が数珠つなぎに道を埋め、まるで一昔前に日本で流行った暴走族状態です。歩道にいる人たちもレイカーズ（ロサンゼルスのプロバスケットボールチーム）が優勝したかのように旗を振りまくっています。だんだんとお祭り騒ぎに成ってきました。悲しみから愛国心高揚へと心の焦点が移り変わっているのを目の当たりにして、私自身は先程までの感動が次第に不安へと置き換えられてきました。この日を境に、アメリカの私の周りの雰囲気は悲しみを、敵に対する怒りに転化し、戦争というはっきりとした形で現れてきたように感じます。

■追悼法要

禅宗寺では事件からちょうど一週間たった18日の夜、同時多発テロ犠牲者追悼法要が行われました。当初は幹部会会議の前に身内だけで行う予定だったので、時間の関係もあり告知をしていなかったのですが、電話連絡だけで平日の夜というのに若い人からお年寄りまで、百名近くの人が集まりました。みんなお寺でこういう集まりが在ることを心から望んでいた人たちでした。話を聴いてみると、お孫さんが貿易センタービルで働いていた、とか、ロサンゼルス空港でレストランを経営していたが事件後三日で店を閉めざるをえなくなった、とか。事件後気持ちがどうしようもなく落ち込んでいる、など多くの人が重い気持ちを持って集まってきました。法要では始め、参加者一人ひとりがキャンドルを捧げて暗い堂内へ歩み入り黙とう。読経の中一人づつ前に出て献灯していく、というものでした。追悼と平和祈願の回向に続き、秋葉総監と加藤先生からの法話があり、終わったときには、持ってきた重たい気持ちがどことなく軽くなっているのをみんな感じていました。私自身もこの一週間の間よどんでいた重い気持ちに区切りをつける事ができました。宗教儀式が人間の心に与える役割を十分に果たした法要でした。この日集まったドネーション1,005ドルは後日「September 11th Fund（基金）」へ送られました。また翌日には、秋葉総監と理事長の名前で、事態の平和的解決を望む手紙が大統領宛に弔意を添えて投函されました。

■学校の対応

州知事は事件の日、既に登校している児童を保護者がいるかどうか判らない家に返すより、学校に居るほうが安全、と判断して小学校などは通常授業を行い、逆に自立して行動がとれる学生が通う大学などは休校という処置を迅速にとりました。また、児童の親宛に、子どもへのトラウマ的影響を与える恐れがあるということで、テレビによる強烈な映像から子どもを遠ざけるように、という手紙が配られました。毎日、プレッジ（アメリカへの忠誠を誓約）をクラス全員で行います。この事件までは先生によってはやっていなかったクラスもあったようですが事件後は徹底しています。アメリカの教育で愛国心は教育の根幹に位置しているように感じます。アメリカで子どもを育てる日本人として、愛国心については家内と二人、いつも複雑な想いです。

■アメリカの報道・日本の報道

数日間、どのチャンネルもひっきりなしに旅客機がト

禅宗寺による追悼法要

レードセンターに衝突するシーンやビルが無残に崩壊していく映像を止めどもなく繰り返していました。また、どのチャンネルどの画面にも必ず星条旗がありました。今回の事件では、インターネットとテレビを通してアメリカと日本の報道を貪っていましたが、だんだんと内容、焦点の違いを感じるようになってきました。アメリカの報道は連日、星条旗をバックにニュースを流します。ラジオでも気付くと愛国心を煽る曲ばかり流しています。アメリカの報道はテロリストをやっつける正義の戦争しか見えてきません。現在戦争状態のアメリカにとって都合の悪い情報はほとんど出てきません。もちろん自由の国アメリカですからそのことを書き立てる人も平和を叫ぶ人もいます。しかし、メジャーなメディアでは決してアメリカにとって都合が悪いことは大々的に取り上げられることはありません。たとえ扱ったとしても、無機的な情報になっています。たとえば、敵国となったアフガニスタンについてもほとんどの人が具体的な状況を知りません。広さや人口、簡単な歴史程度の紹介しか為されていないのです。日本では難民や生活状況など、もとNGOの方などが肉声を以て伝え、イスラム教についても特集を組んで客観的に伝えています。報道の自由はあっても国民的感情や国の意向をそのまま反映しています。日本の報道と比較するたびに、この国は現実に戦争をしているのだと実感させられます。

■私の周り

犠牲者への悲しみは同じなのですが、こと戦争に関しては賛成と反対の両方の意見があります。アメリカのマスコミが出す世論調査の数字では九割か少なくとも八割以上の人が戦争を支持しています。しかし、私自身が感じる世論は決してそうともいえません。私の周りには戦争を支持しない人の方がはるかに多いからです。もちろん太平洋戦争を経験している日系の人々は現在アフガニスタンが置かれている立場を経験した人々ですから相対的に戦争反対の人が多いのは予想できました。坐禅会に来る仏教信奉者も仏教の教義を反映して戦争に反対の人が多く、坐禅会のディスカッションでも多くこの問題が取り上げられました。仏教徒でも日系でもない、ごくふつうのアメリカ人である私の友達、又は家内の友達の中にも実際には戦争を支援できない人が多くいたのには驚きました。ですが、みんな、九割以上の人が支持しているという空気の中で、とても恐ろしくて表立って言えないといいます。私がお坊さんだから正直に言うけど、という人もいました。なるほど、戦争反対は女性やティーンが言うことで、そんなことを言えばチキン（弱虫）といわれるぜ、という人も確かにいました。調べてみると、各メディアが行った世論調査は約700軒から1000軒ほどの電話調査でした。アメリカの人口約三億。う〜んとうなってしまいました。ただし、戦争支持のほとんどの人が現実を見据えて、戦争は良くない、決して素晴らしいことではないけれどもやむを得ない、という立場での支持である事を忘れてはならないと思います。これが常に戦争という選択肢を持っている国アメリカと戦争を放棄した日本の大きな違いだと感じています。

■その後の影響

飛行機が飛ばない間、リトル東京のホテルは日本へ帰れない人たちでいっぱいでした。しかし、空の便が一旦回復すると、ホテルから人が消えてしまいました。その後誰も来ません。キャンセルにつぐキャンセルで来年の予約までほとんどキャンセルになってしまったそうです。リトル東京を闊歩する観光客の姿はほとんど見ることができなくなってしまいました。レストランもホテルも観光業者も深刻な状態に陥っています。みんな口をそろえて言います。日本ではアメリカと言えば危ないと思い込んでいるようですが、みんな平常通りの暮らしをしている。日本の報道ではまるでアメリカ全体がテロ攻撃されているようだが、自分たちは、日本に「アメリカは危険」というレッテルを貼られてしまったことがテロ攻撃より打撃が大きい、そんな肉声を街を歩くたびに聴きます。多くの友人やメンバーさんも仕事を失っています。事件後二カ月が経ち、さらに深刻になってきました。日ごろお寺に余り顔を出さない方がお茶を飲みに来ます。しばらく世間話をした後、何かあったんですか？と水を向けるとほとんどの人が仕事が上手く行かない、解雇された、と疲れ切った心を吐露します。その度に事件の影響が深刻に現実の形になっている事と、僧侶であることの責任の重さを痛感します。

観光客が消えたリトル東京

9月11日、その日ハワイでは…

ハワイ（マウイ満徳寺）開教師
東京・市ヶ谷 長泰寺　副住職
ＳＺＩ事務局　大　谷　有　為

2001年9月11日、ニューヨーク・マンハッタンにあるＷＴＣ（世界貿易センター）のノースタワーにハイジャックされた１機目のアメリカン航空11便が突入したのは現地時間で午前8時45分であった。その時刻はハワイの現地時間では、まだ同日の夜明け前の2時45分であったため、ハワイの多くの人々がこの惨劇を最初に目にしたのは、11日の朝のテレビのニュースであったと思う。

この日一日、アメリカ本土東海岸から、遠く約6千マイル離れたハワイでは、炎上するワシントン郊外の国防総省、ピッツバーグ郊外に墜落した航空機、ＷＴＣの崩壊と次々にテレビに映し出される悲惨な映像に多くの人々の目は釘付けになり、心は不安と恐怖に支配されることになった。

この9月11日のニューヨーク現地時間の午前10時前には、この一連の事件がテロによるものであるとのブッシュ大統領の声明が出されたため、米国政府は直ちに厳戒態勢にはいり、航空当局は米国内の航空機全機の離陸を禁止、各空港も閉鎖され、ほとんどの政府機関も閉鎖された。

空港の閉鎖は、ハワイ各島間の交通手段をほぼ100％航空機に頼っているハワイの住民にとっては、実質的に各島間の移動が不可能であることを意味する。実際にこの日は、マウイ島のカフルイ空港でも、厳重な警備体制がとられ、空港に近づくことも出来なかった。

日本の外務省からも、在米邦人に対して、危険を最小限にするために役所などの公共機関の利用を出来る限りさし控えること、また、混雑を避けるために国際電話の利用も緊急の場合を除いて控えること等の勧告が出された。

さらに、ハワイに滞在していた観光客も日本人観光客1万5千人をはじめ、約7万人もの人々が足止めを余儀なくされた。加えて、ホノルルのアラモアナ・ショッピングセンター、学校などの施設も一時的に閉鎖されたために、観光客のみならずハワイ現地住民の不安は増大した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2日後の13日から、空港の一部は開放され、徐々に落ち着きを取り戻しつつあった。が、しかし、この一連のテロ事件は、事件発生以前からすでに下降気味だったアメリカ経済にはとても大きな打撃となった。

特にハワイ州の経済にとっては、多くの輸送を航空機に頼り、ハワイ経済全体の4分の1が観光産業とその関連産業によって支えられているために、アメリカ本土のどの州よりも決定的な打撃を受けることが避けられない。航空会社は、利用客の激減に直面し、20％前後のフライト数の削減、また1万2千人の一時解雇をした航空会社もある。旅行会社では、日本人による海外ツアーは全体の25％がキャンセルされた。ホテルでも、日本からの観光客、アメリカ本土からの観光客の激減が原因で、利用客数は例年の3分の1程度に落ち込んだ。観光客相手のレストランや小売店では、売り上げが半分にまで減少してしまったところもあり、営業時間の短縮、従業員のレイオフといった対策がとられたが、結果として失業手当を申請する従業員が急増した。

いつも日本からの観光客でにぎわうワイキキのビーチ、カラカウア大通りも、足止めされていた観光客が帰国した後は、人影はまばらになった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

同時多発テロ事件発生以降、犠牲者の霊をなぐさめるための追悼会・法要がいたるところで行われている。教会・寺院のみならず、会議・会合・昼食会、人が集まればどこでも、黙とう・祈りがささげられている。

ハワイ仏教連盟では12日の夜に追悼会が開かれた。そして、マウイ満徳寺でも、秋彼岸の法要の際に、このテロ事件の被災者に対する法要が行われ、参列者全員により、祈りがささげられた。ハワイ曹洞宗寺院連盟でも、10月6日に開催された秋季会議のオープニング・セレモニーの中で、同様に参加者全員により被災者に祈りがささげられた。

また、このテロ事件の被害者を援助しようと、犠牲者への見舞金の募金運動もいたるところで始められている。ハワイ・コミュニティー・ファウンデーションが各金融機関、その他の団体とともに「9月11日基金」を設立し、一般の人々に寄付を呼びかけている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今回の同時多発テロ事件で、不幸にもターゲットの一つとなり、航空機の突入により崩壊したＷＴＣ内の被害者のリストに一人の友人の名前を見つけた。彼は、私がまだ会社に勤務していた頃、一緒に机をならべて研修を受けた同期の一人であった。彼の冥福を心より祈りたい。

私たちの祈りは、このテロ事件の犠牲者の方々に対してだけでなく、犠牲者の遺族の方々・友達、そして、さらに、この事件でかけがえのない人を失った世界中のすべての人々にささげられる。

西暦2001年9月11日

ＳＺＩ事務局　　秋　　央　文

今回の残虐極まりないテロ事件の詳細に関しては、ほぼ不眠不休の状態で映像を流し続けたCNNライブに道を譲る事としたい。早速本題に入りたいと思う。

「だから宗教は甘いんだよ…。」これは今回のテロ事件に対して、平和的解決を望むある宗教者の発言を聞いて口に出た友人の言葉である。確かに今までの歴史を振り返ってみても、平和とは用意されているものでなく勝ち取るものであった。また一口に戦争と言っても「勝ち取る平和」を大義とした国家間の覇権争いであった事実も明白である。

しかしその時代への反省から、現代社会においてはその勝ち取る術としての「外交」が、最も平和で理想的な国家間紛争の解決の道として重視されてきた。加えて国家対国家の調整がうまくいかない場合には、国連という超「国家」たる国際調整機関がその仲介役を果たすというのも今や世界の常識である。その外交による国際平和の均衡とは、簡単に示せばこの様な枠組みのもと成り立ってきたとも言えよう。

しかしその国際平和の均衡を、いとも簡単に崩壊させてしまったのが今回のテロ事件である。理想というのは常に現実との狭間に揺れ動くのが時代の性で、今回も国際社会はこの未曾有のテロ事件に対して武力行使という現実の利を選択しようとしている。この事からも未だ武力行使による「勝ち取る平和」が世界から支持される構図が浮き彫りとなった。

どの様な大義があろうともテロが正当化される事は絶対あってはならない。またそのテロに屈してしまう事も正義の名において許されるものではない。しかしだからと言って、それが武力行使容認の錦の御旗となる事も決して理性的ではないであろう。何故なら武力行使により直接被害を被るのは何の罪もない一般市民だからである。しかしこの様なヒューマニズムも厳しい現実の前には甚だ無力である。現に外交という手段で平和が得られない場合には、武力行使による「勝ち取る平和」が国際的な正義として容認されるからである。

人は「犯罪があるから警察が必要なのであり、その警察自体を否定してしまったら世の中から犯罪は消えてなくならない。」と言う。そしてここで言う「警察」とは「武力行使」という言葉に置き換えられ、今回の様に社会的影響が大きい事件の場合、世論と呼応して武力行使は正義として容認される。この現実の前に、いかなる理想も単なる空論として無力化するのである。

ある政治家はこうも言った。日本が国際社会への積極的参加を謳い、責任ある国際貢献という立場を踏まえるならば、感情に身を任せた傍観者的な発言、つまり責任の伴わない第三者的な発言は慎むべきであると。被害当事国の立場、また被害者遺族への配慮、今後の国際社会の一員としての日本のあるべき姿を考えれば、それはある意味で的を得た発言とも言える。

私も日本という国際社会に身を置く組織の一個人である。理想と現実のバランス感覚ぐらい人並みに身に付けているつもりだ。故にこの政治家の心情はよく理解できる。ある意味で現実の安定があるからこそ、人は理想を語り得るのかもしれない。国を導く者はその理想と現実の狭間を見極め、国民・国家を正しい方向へと導くのが義務であり、責任であるとも言えよう。今回も国際社会における現実を冷静に直視すれば、日本が国際社会の一員として、可能な限りの責任と義務を果たすのはある種当然の選択とも言える。

故に私はこう考える。だからこそ武力行使には慎重を

期すべきだと。被害当事国の怒りと失笑を買おうとも、また周囲の人間から「だから宗教は甘いんだよ…。」と揶揄されようとも、私はあくまでも外交努力による平和的解決の道を模索していくべきだと考える。理由はいたって簡単である。我々は政治家ではなく仏教徒だからだ。仏教徒が武力行使（＝戦争）を容認してしまったら、我々のレゾンデートルはどこに見出されると言うのであろうか。誤解を恐れずに言うのであれば、仏教徒を始めとする宗教者は、頑ななまでに理想論者であっても良いと思う。またそれが社会から与えられた（許された？）特権だとも考えている。

今回の許し難い同時多発テロ事件、加えて今まで世界各地で発生したテロ事件、並びに戦争という負の遺産による多くの犠牲者、またその遺族の方々に対し、私は衷心より哀悼の意を申し述べたい。私は何の罪もない人達の生命を無差別に奪うテロが憎い。加えてその偏執的なイデオロギーに宗教が利用されている現実に憤りと虚しさを感じる。だからこそこれ以上の惨劇は繰り返されてはならないものと考えている…。（西暦2001年9月11日における同時多発テロ特集番組を前に筆者想う。）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

追　記

西暦2001年10月7日、米英両空軍によるアフガンへの空爆が開始された。またこの拙稿が掲載される頃には、新たな戦時下の局面が映像を通じて全世界に発信されている事であろう。

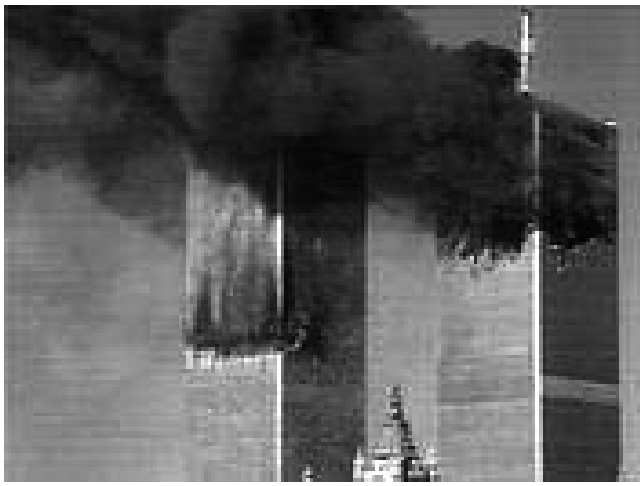
あれから世界は「正義」についての議論に多くの時間を費やしてきた。それは即ち21世紀における国際新秩序の模索であったとも言えよう。

ここで多くを語る事は避けるが、ふと「この戦争は聖戦といった類の宗教戦争なのだろうか…。」と考えてみた。実は私は違うのではないかと考えている。あくまでも聖戦と無差別テロは一線を画され、混同してはならないものと考える。確かに過去の歴史において、宗教により戦争が引き起こされた悲しい現実があったのも事実である。しかしいつの時代も、宗教により無差別テロが容認される事だけは決してあってはならないであろう。

ここで私は敢えて敬虔なるムスリムに問いたい。そのイスラムの教えを信仰する者の理性と自覚を以て、今回の同時多発テロを「聖戦」として容認できるのであろうか。

確かに今回のテロに至るまでの、中東の紛争の歴史と複雑な宗教事情については理解しているつもりだ。またそのテロの連鎖という負の歴史により、多くの犠牲者を生み出してきた悲しい現実についても承知している。しかしだからと言って、それがあの同時多発テロを容認する免罪符にはなり得ないであろう。いや、なってはならない様な気がする。しかもその免罪符にイスラム教という宗教が利用されようとしている。敬虔なるムスリムはそれを看過できると言うのであろうか。

私は最後まで世界３大宗教の一つであり、全世界に12億人いると言われるムスリムの理性と良心を信じたい。そして彼等がその宗教的立場から、自発的に戦争回避の道を模索してくれる事を期待して止まない。それは、アメリカやイスラエルにおけるモラリストについても同じ事が言えるだろうが、ムスリム諸氏にそれを期待してしまうのは、やはり「宗教」という金看板を背負っているからであろう。やはりこういう偏った考え方も、中東における歴史と宗教事情に疎い浅見として一笑に付されてしまうのだろうか……。



高祖道元禅師750回大遠忌

アジア仏教徒フォーラム

村落の僧侶が「開発僧」になるまで　― タイの「開発僧」を事例に ―

東京外国語大学大学院　泉　経武

2001年10月、愛知学院大学において大本山永平寺主催による高祖道元禅師750回大遠忌記念事業「アジア仏教徒フォーラム」が行われ、地方村落社会で人々の生活改善と向上のために開発活動に従事する「開発僧」と称される僧侶が上座部仏教圏であるタイとカンボジアから2名ずつ招かれ講演を行った。

おそらく「開発僧」という言葉そのものに違和感を覚えた人が少なくなかったのではなかろうか。途上国における「開発」と、仏教「僧侶」とによる合成語であることは思い付くが、それがなぜ一つの単語を作りうるのかという疑問がわいてくる。当日の講演では、カンボジアにおける開発活動がまさしくゼロからの出発であることをリアルに伝える報告に、あらためて今日のカンボジアの置かれている状況の深刻さを痛感させられたが、タイとカンボジア双方の僧侶の講演は時間的制限もあり諸活動の紹介と、そのなかで仏教を信仰する主体はいかに形成されていくべきかに集約され、彼らと彼らを取り巻く歴史的・社会的状況との接点にあまり触れられていなかったように思われた。本稿では、タイの「開発僧」を事例に、村落社会における一僧侶が「開発僧」となるまでの背景と、それを踏まえた「開発僧」出現の評価を試みたい。

まず、タイ仏教と開発の接点がもたれるに至った経緯を概観する。タイにおいて開発が政府政策として推進されるに至ったのは1960年代に遡る。当時の首相であったサリット・タナラット元帥（在位1959～1963年）は、タイの伝統的政治形態である「国王、宗教、民衆」の国家原理に基づく国家の建設と統合のために、経済開発、国家の安全管理、反共産主義対策を打ち立て、61年「国家経済（社会）開発計画」を開始させた。

その後、北・東北・南の各地方に開発委員会が設置された。サリットは、民間主導型の経済開発を目指し、政府の役割をインフラ整備（道路・灌漑整備、保健所・学校の建設など）に限定した。農業における自然環境の厳しさ、それに伴う経済的貧困、反政府勢力である共産主義運動の活発な地域、ラオス・カンボジアに接し国防上の重要性などの理由から、特に東北地方（イサーン）の開発に力を入れる。60年代には、この地方に共産主義がかなり浸透し住民にもその脅威が感じ取られていたからである。開発僧とみなされる僧侶がイサーンに多くみられるのも、こうしたタイの歴史的事情にもよる。

サリットが考えた国家形成に、タイの仏教は手段として取り込まれて行く。サリットは演説で「仏陀は世界で最も偉大な革命家の一人である。なぜなら、天上の教えを実践の教えに翻訳し、人々の心に革命をもたらした。革命とは、自己を善に向かって律することである」と述べ、社会の改善・改革理念の原点を仏教に見い出していた。彼はサンガの再編にも着手した。サンガ内に生じていたマハーニカイ派（在来派）とタンマユット派（改革派）の対立の原因を「1941年サンガ統治法」の三権分立にあるとみなし、法王と長老会に権力が集中する新たな「1962年サンガ統治法」を制定した。その過程で、サリットは「サンガと言えども、世俗の政治から独立した存在ではない。仏教の普及という社会活動を通じて、国家建設と国民の繁栄に貢献すべきである」と主張した。

その後、タイ・サンガは政府の開発政策に連動し、バンコクの仏教大学では地域開発のための（再）教育を受けた学生僧侶を地域社会に派遣する「タンマトゥート（法の使節）比丘計画」と「タンマチャリック（法の巡礼）比丘計画」（ともに1966年）を実施する。俗事である開発活動に出家者である僧侶が直接的関与することに対して疑問視する見方がサンガ内にも、また国内の批評家のなかにもあった。しかし、このサリット首相に始まる仏教を手段として用いる政府による開発政策の実施と、その後のサンガや仏教大学の一連の動向によって、開発におけるタイ仏教僧侶の役割とその重要性がタイ国内で語り始められるようになったことは事実である。こうして、サリットに始まる「開発の時代」以降に政府による「上から」の経済開発から地域住民参加型の社会開発に移行がみられたことや、開発理念の地域社会への浸透の面で、バンコク中央官吏と地方役人の間、あるいは地方都市部の役人と村の住民との間に開発の内容や実行方法について認識のズレが今日に至るまでみられており、また、共産勢力の弱体化に伴い82年にはタイ軍部が共産党に対し勝利宣言があり共産活動への対応の必要性に減少がみられたが、政府と地域開発と仏教の関係はサリットの時代から今日まで基本的には変わっていない。

それでは、次に「開発僧」と称される僧侶はいかなる僧侶であるのかをみていきたい。

まずは、タームとしての「開発僧 Phra NakPhatthana （Phraは僧侶、NakPhatthanaは開発官、現在はこの呼称が定着している）」についてであるが、私見の限り活字としての初出は1982年である。筆者の調査によると、地域に根ざした開発僧のネットワークが初めて出来上がるのが1981年（この時点ではPhrasangkha phatthana（Phrasangkhaは僧侶、phatthanaは開発）と呼ばれていた）からであるところをみると、おそらく遅くとも1970年代後半にはそれぞれの村落で開発活動を開始させ何らかの成果を上げていた僧侶らが、横のつながりを必要とする動きを見せ始めたのが80年代前半ではないかと推測される。

しかし、ここで気を付けなければいけないのが、当初「開発僧」という呼称は、開発活動に従事する僧侶自身によってでもなく、また学的関心から研究者によって定義づけられたのでもなく、彼らをサポートしていたＮＧＯ活動グループによって名付けられた点である。おそらく、現在のタイで説法や講演のなかで自らを開発僧と称するのは、最も顕著な開発活動歴を持ち今回来日されたナーン比丘だけであろう。また、開発僧のネットワーク形成においても、僧侶間の連携を必要とみなしたのは実は僧侶自身によってではなく、やはりＮＧＯ活動グループによってであった。つまり、地域村落社会において村びとの生活改善のために開発活動を行っていた僧侶を、彼らが活動の基盤としていた村落の外側に知らしめる当初の役割を果たしたのはタイのＮＧＯ活動グループであった。その後、大学等の研究機関によって、地域開発の具体的な活動事例としてタイ人研究者から徐々に注目を浴びるようになる。

タイのＮＧＯ活動が地域社会で活発化したのは1970年代からである。バンコク都市部からタイ社会全体にむけて変革を望むことよりも、現実的な困窮状態に晒されている地方農村部で具体的な活動を行うことが早急の課題であるとみなされ始めた。そこでは政府による「上から」の付与される開発ではなく、地域住民の内発的な開発への自覚に基づくボトムアップ型の開発が思案され始め、ＮＧＯのような外からの援助にのみ依存しないためにも、地域住民に対してリーダーシップを発揮できる人材の登場が求められた。そこで注目されたのが、村長であり、学校教師であり、僧侶であった。こうしてAlternative Developmentの騎手として村落レベルの僧侶はＮＧＯ活動グループによって着目されるようになった。

開発僧の活動は、米銀行、生活協同組合、児童センター、貯蓄組合、職業訓練センター、複合・自然農業の普及、薬草等の伝統医療プロジェクトなどが挙げられる。近年では、エイズ患者のためのホスピス活動や、青少年犯罪の急増に伴い家庭教育問題に取り組む僧侶が増え、コミュニティーからもこうした問題に僧侶が理解を示し、その役割を担うことが求められ始めている。資金は、僧侶自身への寄進、村びとからの出資、国内外のＮＧＯからの援助から得ている。

このように、60年代に始まる政府開発政策とそれに伴うサンガの動向、その後70年代からのＮＧＯによる地域開発への参画が、村落レベルの僧侶を開発僧に仕立てていく要因であったと言えよう。しかし、これらはあくまで外的な要因にすぎない。開発僧は活動の開始にあたって、村びと宅に生活状況を訪ね歩き、村外で公的機関や仏教大学が主催する開発活動のための研修会やセミナーに参加している。また、村落の寺院施設の保護や増設のための寄付金を活動資金として一時的に借用したり、米銀行や生協などを始めるにあたり村びとに代わって資金の管理を行うこともしている。こうした行為は、「僧侶の俗事への不関与」を常識としている村びとの信仰世界を揺るがすことにもなった。それだけに、彼ら僧侶には自らが心底納得し、同時に困窮状態にある村びとを救わねばならないとする仏教者としての信仰上の決意が内発的な動機となければならなかった。開発活動に関わる切っ掛けを彼らに訪ねると、ほぼ決まってなされる返答が「生活に困っている村びとを助けたいと思ったから」であることからも、開発活動が彼らの信仰実践と同一線上にある主体的に選択された行動であり、現実の課題に応じる信仰実践の応用形態であることが分かる。そこには、反"小乗"の精神を見てとることができるのではなかろうか。開発活動への従事は、僧侶の信仰実践に基づき、開発の進展に伴う生活状況の急激な変化のなかで、村びとが主体的な生活の実現のために仏教信仰をいかに応用していけるかの試みであった。「開発僧」と呼ばれる僧侶の出現は、出世間レベルのある僧侶と世間レベルにある村びと双方にとっての、歴史的状況に即した結びつきの再生過程にみられた現代タイ仏教の一つの現象であるといえよう。

祈りと平和のつどい

アジア子ども文化祭 in 仙台 in 名古屋

ＳＺＩ事務局　飯　島　尚　之

「平和・希望・夢」

フィナーレは
会場が一体となり
感動、感動の涙でした。
ありがとう子どもたち。

SOTO禅インターナショナルは、高祖道元禅師750回大遠忌文化事業の特別記念行事である「祈りと平和のつどい」の運営に関しても積極的に協働支援させて頂きました。

アジア子ども文化祭「平和・希望・夢」は一連の行事中でもメイン・イベントとして、仙台公演が９月29日、名古屋公演が10月６日に開催されました。

その趣旨は、21世紀を担う仏教を背景に育つアジア各国の子どもたちが文化交流をとおして、共に学び、夢を共有できる平和なアジアの創造に向け、思いを一つにしていきたいとの願いのもとに企画されました。東南アジアの国々はそれぞれ古い歴史と豊かな文化を持っていますが、近年は戦争と貧困が繰り返されています。そうした中で文化を守り、育んできた子どもたちが、戦争のない未来への期待を夢みて来日しました。

お互いの文化の違いを認め合い、尊敬しあう「共生」という言葉が見直されていますが、子どもたちは伝統舞踊を共演する中ですでに実行しているように感じました。

今回は、社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA・曹洞宗国際ボランティア会）がボランティア事業を行っている国に、ベトナムを加えた４カ国の10歳から15歳の子どもたち、総勢50人以上を日本に招き、開催各地の子どもたちを加えて舞台を演出しました。

一行は９月26日に来日、13日間に渡る日本滞在は９月29日の仙台公演に始まり、千葉では寺ステイ（ホームステイ）とテレビでお馴染み福留功男氏からのプレゼントで夢にまでみたディズニーランド東京での１日、東京月島小学校からの招待で子どもたちとの文化交流会、東名高速からみた富士山、静岡天竜では地域の方々をお招きしての合同練習を兼ねたミニ公演会。新幹線のスピードにビックリしたり、岐阜羽島で人工スキー場での寒さと雪遊びにドキドキしたり。そして10月6日の1500人の前で舞った名古屋公演と来日した子どもたちにとっては、一生心に残る驚きと感動の毎日でした。

来日したアジアの子どもたち、さらに一連の事業に携わった日本の関係者にとっては、国際理解学習の場として大変有意義な企画でした。テーマである「平和・希望・夢」は子どもたちの成長と共にその波及効果をアジア各国に向け期待でき、大遠忌の趣旨を十分に未来に伝えるにふさわしい行事であったことを実感しました。さらに、この事業をとおして新たなる人材の発掘と、人材育成の場、子どもたちへの夢とその環境を提供した大遠忌文化事業は、今後大きく評価されるものと思います。

子供たちには「平和、希望、夢」がいっぱいある。それを育てるのは大人の責任であることを実感し、忘れかけた感動を呼び起こしてくれた子どもたちに「ありがとう」を送りたいとおもいます。

ダイジェストアルバム
21世紀の子供たち

初めて着た浴衣でポーズ

ベトナムからは妖精のようなアオザイの舞踊

東京・月島小学校を訪問、楽しかった言葉を超えた交流

大人顔負け！ラオスの子供たちの舞

静岡　天竜にて
名古屋公演を控え全体練習後の集合写真

男女で踊る少しコミカルなカンボジアの舞

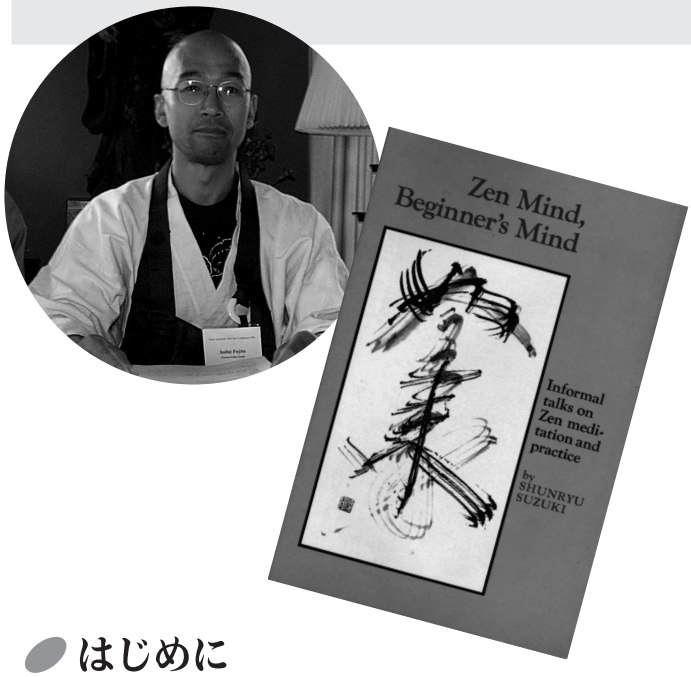
名古屋スノーバー羽島にて
人工スキー場で雪あそび

ちょっと緊張気味の出番を待つタイの子供たち

アメリカの仏教書

第１回／禅仏教篇①
“ZEN MIND BEGINNER'S MIND”

アメリカ　マサチューセッツ州　ヴァレー禅堂　堂長　　藤　田　一　照



はじめに

このたび編集子から「アメリカの仏教書」についてなにか連載ものを書いてもらえないかという依頼を受けました。どうしてわたしにそういうお鉢が回ってきたのかよくわかりませんが、お役に立てればとおひきうけしました。

こちらで仏教についてなにか話をしたり勉強をしたりしようと思えばいやでも英語で書かれた本を読まない訳にはいきません。1987年の夏にこの地に来たときには、わたしは「煩悩」とか「中道」、「四聖諦」、あるいは「修行」とか「悟り」、「正身端坐」とかいやしくも仏教や禅について語ろうとするときにはどうしても触れなければならない基本語を英語ではどう言うのかということすら知りませんでした。読者の中には「そんなありさまでよくアメリカに行ったもんだ」とあきれかえる人がいるかもしれません。いまからふりかえってみると、ずいぶん向こう見ずなことをしたもんだと自分でも感心するくらいです。それはともかくとして、そういう情けない状態でしたから、必要に迫られて、日本にいて日本語と漢語で少々学んだ仏教や禅をアメリカでもういちどあらためて英語で「学びなおす」ということをしなければなりませんでした。これは、わたしには非常にありがたい「プレッシャー」でした。そのおかげで英語の語彙や表現法についてずいぶんマスターできましたし、穴だらけだったわたしの仏教理解（わたしは学校では心理学を専攻しましたので仏教教学についてはほとんど独学なのです）がほんのすこしですが一貫性と体系性をもつようになったと思います。

ここにきてから十四年あまりになりますが、その間だけをとってみても、書店に並ぶ仏教書の量はめざましく増えました。さらには、量だけではなく質的にもかなり向上しているという印象をわたしは持っています。わたしは仏教学の専門的研究者ではありませんので確かなことは言えませんが、その分野では先端をいっている日本の仏教研究者でも、英語圏の研究者の研究業績を無視しては遅れをとるという状況になっているのではないでしょうか。本欄ではそういう仏教の学術書ではなくて、アメリカでよく読まれている一般向けに書かれた仏教書のなかから、わたしがこの欄を借りて紹介したいと思うものを、独断と偏見で選び、若干のコメントを加えてみたいと思います。望むらくはそうした本の紹介を通していまのアメリカの仏教事情をいささかなりとも「点描」できればとも思っています。

最近はチベットのダライ・ラマ十四世やヴェトナムのティクナットハン師の本、あるいは南方仏教系の本などが邦訳され、これまであまり一般には知られていなかった、伝統的日本仏教以外の仏教伝統のことが少しずつですが日本人の仏教理解のなかに浸透してきているようです。こういう流れのなかで、わたしは、「英語」で書かれた良質の仏教書を日本語に翻訳して紹介するという仕事をしたいと思っています。仏教を西洋経由でもう一度日本へ「逆輸入」するということに微力ながら肩入れしたいのです。その第一弾として、今年2月にティクナットハン師の『禅への鍵』の邦訳を春秋社から上梓しました。2冊目の本がいま刊行準備中です。今後も主に現代の西洋人によって書かれた英文仏教書を日本語に翻訳する仕事を少しずつ進めながら、仏教の種が播かれてから150年たらずのアメリカの地で読まれている仏教書がその十倍程も長い仏教の歴史を誇る日本でどう読まれるのか、興味をもって見守っていきたいと思っています。できればそれが日本の仏教が再活性化するささやかな一助になればというひそかな期待をいだきながら……。

鈴木俊隆老師の本

前置きが長くなりました。今回は第一回目ということで、われわれ曹洞宗門下の先達である鈴木俊隆老師（1904－1971）の“ZEN MIND BIGINNER'S MIND：

Informal Talks on Zen meditation and practice”（『禅心初心－坐禅と修行についての講話』）（Weatherhill）という本をとりあげてみたいと思います。アメリカでは禅に関心をもつ人ならたいてい耳にしたことがあるこの鈴木俊隆という人物のことが、彼の祖国である日本では、どれくらい知られているでしょうか。彼らアメリカ人達はそういう人があまりにも少ないのできっとショックを受けることでしょう。少なくともわたしはこちらに来るまでその名前を聞いたことがありませんでした。禅堂の本棚に数冊まとめて置いてあるのを見つけて、初めての冬ごもりのとき英語の勉強のつもりで読んだのが、この本との最初の出会いでした。その著者がアメリカでも最大であり「老舗」の禅グループであるサンフランシスコ禅センターの創設者であること。そして、このヴァレー禅堂がそもそも誕生するきっかけをつくったアメリカ人女性が実はその人の弟子であったことなどもそのころ初めて、ここの参禅者から聞かされました。

これも後から知ったことですが、この本は英語で書かれた禅に関する一般向けの本としては長寿を誇るベストセラーであり、押しも押されぬ「古典」としての地位を確保しているのです。こちらの大学での仏教に関する入門的なコースでは禅の基本的テキストとして必読書に指定されることがしょっちゅうですし、仏教の分野にかぎらず心理学や心理療法、哲学や人生論の本などにもしばしば引用されています。本書は1970年に初版が出されましたがわたしの持っている1985年版ではそれが第20刷となっています。薄いペーパーバックの廉価版で138ページで10ドルたらず（現在の値段）と分量も値段も手ごろであることもさることながら、本書の人気の秘密はなんといってもその内容にあると思います。当時は曹洞禅の伝統に基づく一般向けの英語で書かれた禅の本は皆無に近く、ましてや坐禅修行のさまざまな側面について懇切に具体的に説いた「実践のための手引き書」となるとなおさら希少でした。そういったものとしては本書がおそらくはじめての本だったのではないでしょうか。

“ZEN MIND BEGINNER'S MIND”は初心の純粋さを保つことの大切さを説くプロローグからはじまって、第一部「正しい修行」では姿勢や呼吸、雑念など具体的な坐禅の実際について触れたあと、第二部「正しい態度」、第三部「正しい理解」で無所得常精進の態度や平常心など禅修行を正しい軌道にそって深めていくために心すべき諸々の問題について語り、そして最後に、伝統的な僧でもなければただの在家でもない新しいありかたで禅を生きようとしているアメリカ人の弟子達を励ます「禅の心」と題されたエピローグで結ばれています。禅についての単なる知識を得るところからさらに一歩踏み出して、実際にそれを実践しようとしている人々にとっては「干天の慈雨」にも等しい、暖かい励ましと的確なアドバイスに満ちた本として貪るように読まれたことは想像に難くありません。今の時点においても、「英語で書かれた曹洞禅の実践的な本は？」と聞かれたら、わたしは迷わずこの本と内山興正老師の『生命の実物』（柏樹社刊）の英訳本である“OPENING THE HAND OF THOUGHT：Approach to Zen”（『思いの手放し－禅へのアプローチ』）（Arkana）の二冊をあげます。

本書は鈴木老師が執筆されたものではなく弟子達に話した講話テープからの筆記がもとになっています。実利的で個人主義的、あれかこれかの二者択一論理、目的追求的な傾向の強いアメリカ人たちに、「結果を求めずただする」とか「無所得がもっとも尊い」とか「姿勢と息にすべてをまかせる」、「跡を残さないこと」…といった禅修行の勘所を英語で得心させるのは容易なことではなかったでしょう（いまのわたしにはその苦労が少しはわかります）。鈴木老師は聴衆の多寡に関わりなく何時間もかけて話の準備をされたと聞いています。残された老師のテープやビデオによりますと立て板に水を流すような流暢な英語ではなく、訥々としたしゃべりかたで決して英語がお上手だったとはいえません。しかし言葉もさることながらなによりも老師自身の存在そのものが、師の言わんとすることを雄弁に伝えていたのでしょう。飾り気なしに率直に、生き方としての禅の心髄を語った本書は、もはや師の謦咳に接することのできない人々をも、依然として深いところから啓発し続けています。

1979年に『初心・禅心―坐禅のすすめ』と題された邦訳が出されましたが、その後長らく絶版状態になっていました。最近PHPから『禅へのいざない』として新訳が出ましたので、是非お読みください。

海外レポート／ハワイ発

別天地に移住して新しい人生を始めるまで（下）

ＳＺＩ会員　出　川　成　海

還暦を迎えた翌年、ふと手にした『正法眼蔵随聞記』を一読し大変驚きました。その内容が若い頃から読み親しんでいたパスカルのパンセの内容に酷似していたため、道元禅師のお言葉がズバリ私の内部に共鳴したのです。人は独り死ぬ、最後に頭から土をかけられて永遠の終わりである、と語るパスカルは人間の生が如何にはかなく不安定であるかを徹底的に暴いて見せ、この非情な現実凝視を通して信仰へ導こうとします。道元禅師も、朝に生じ夕に死し、昨日見し人今日亡き事を思え、息が止まれば山野に離散して泥土と化す、この眼前の道理を思えば、何で時光を虚しく過ごせようか、と発心を迫ります。17世紀のパンセの人間省察に先駆すること四百年、より深くより切迫に、無常の道理が既に『随聞記』に縦横に語られていたのを知り深く感動しました。特に私が注目したのは、仏道は「身」で得なければならない。この「体得」のため坐禅をせよ、と説く道元禅師のお言葉でした。それまで机上の書物から得た思想が私の人生の拠り所となっていたのですが、自分の信ずるところが血肉化・体得化されねば実人生の役に立たないのでは、という疑惑と不安が歳を取るにつれつのってきていました。それ故に、仏道「体得」のために坐禅をせよ、という「行」のお言葉を、これぞ我が探しあぐねていた道と受け止めたのです。為にする坐禅はならぬ、また身と心は一如、と後に学びはしましたものの、とにかく仏教とのご縁のきっかけとなったのです。驚いたことにこの一冊の本が人生を変える、という事態が我が身に起こりました。『随聞記』の教えによる己事究明こそ私が探しあぐねていた道と信じ、以降、大本山總持寺と大雄山最乗寺の各種参禅会や伝光会等に参加し坐禅に馴染むようになりました。

折しも、日本のバブル経済崩壊のあおりで私が常駐しておりました日本の会社が売上激減の苦境に直面しました。グループからの資金調達と会社の規模縮小により切り抜けましたが、多くの人員整理が痛恨事でした。解雇を言い渡すのをためらう役員を腰抜けと叱咤し、心を鬼にして自ら陣頭にたって事の処理に当たったのです。しかしこの事件で受けた心の痛みが契機で、改めて自分の人生の脚下を顧み、ビジネスへの関心と情熱が急速に失はれました。引退して豊かな大自然の懐に住み、禅仏教の学習に専念する生活を一刻も早く実現しよう、と決心したのですが、完全引退を果たすまでまる

自宅にて

二年かかりました。引退生活の候補地として、最初、愛する駒ヶ岳を望む甲州北部に目をつけましたが冬季寒冷の厳しさから断念。ハワイにとの発想を得たのは、引退を間近に控えた平成11年2月でした。過去のしがらみを一切断ち切り、新しい人生を始める、そのために太平洋の真ん中のハワイとはまさに打ってつけの地ではないか、と思い到りました。事情があって米国永住権を取得できる、私も家内も他国の人との付き合いに慣れており、下手ながら何とか英語を話せる、これでハワイ移住に必要な最低条件をクリアできます。気が進まなかった家内を説得し、納得ずくの同意を得た上で、早速移住適地の現地調査を始めました。ハワイへとの発想を得た時点で既にハワイ島以外になし、と決めており、島北部カムエラ（ワイメア）の環境の素晴らしさを発見、ここに白羽の矢を立てました。しかも偶然この町の郊外にハワイ禅センターという米人僧の主宰する禅堂があることを知りました。手紙を書きニュースレターを取り寄せ、主宰者の考え方に納得・賛同し、最終的に移住決

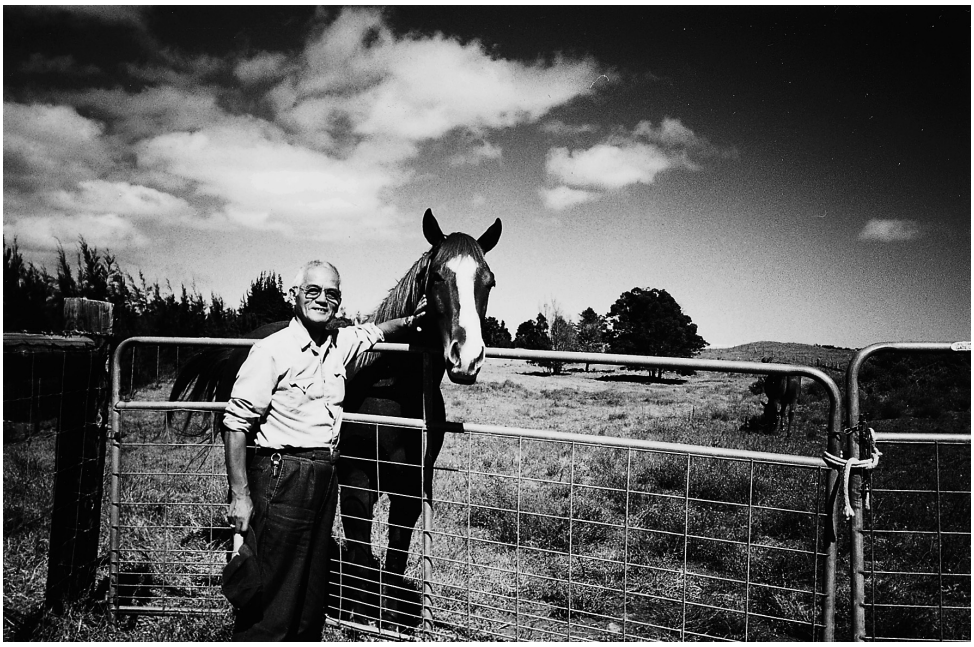
行に踏み切った次第です。

平成12年3月28日晩成田発、時差により同日朝ハワイ島コナ空港着、この日をもって私の日本における65年の生活が断絶し、全く別世界の新生活が始まりました。

緑に囲まれたこの静かな町カムエラは島の北部にある海抜約七百米の高原に位置し、目前に広がる広大なパーカー牧場を前景に標高四千二百米余を誇る雄大なマウナ・ケア山が屏風の様に南の空を圧しています。盛夏でさえ朝晩は大体摂氏18－20度、空気はあくまでも透明、早朝の陽光と微風は何ともいえない清々しさです。冬は寒いのでストーブが必要です。瞑想と読書に最適の地といえましょう。しかも我が家から西へ20分のドライブで美しい熱帯の海浜に達します。この町には牧畜以外これといった産業はありませんが、学校とキリスト教会が多く、特筆すべきはホスピス、セラピーやメディテーション活動が非常に盛んなことです。町を歩くと様々な宗教の布教活動、瞑想集会等の案内のビラが目につきます。人生の悩みに疲れ果てた人達を引き寄せる何ものかがこの地にはあるのでしょうか、ヒーリング（癒し）を求めてここにたどり着く人が多く、また不治の病に冒されてここで死を迎えたいと願う人もいると聞きました。ハワイ島は「癒しの島」とも呼ばれていますが、きっと豊かな自然と清澄な空気がはらむ治癒の力が人々に心の平安をもたらすのでしょう。傷口が自然に癒着する、この「自然な癒着」を促進することがヒーリングの意と聞きました。

さて、家と車の購入、必要な物の調達、諸手続等総てに数ヶ月かかりました。幸いに外地生活の違和感も解消しやっと落ち着いて、そろそろ当地へ移住の目的にかなう生活の確立に取りかかる段となって困惑しました。当地では、禅仏教の学習、読書、自然に親しむ、この三点に絞って専念没頭の積もりでしたが、地元に知己がどんどん増え、従って用件が増え、思いがけず大変忙しくなってしまったのです。地元の人達は皆新参の私共に大変親切で良く面倒を見てくれます。隠遁のために移住したのではなく、人間関係は大事であり楽しいので地元交流を重視した生活になるのは止むを得ませんがジレンマです。唯一苦労しているのは日常英会話で、トマトと連呼しても通用せず、綴りを言うと、なんだトメイトウか、と言われる始末です。禅センターの浄真オルトハウス先生は、坐禅は無言の行ゆえ会話は不要、と冗談をおっしゃりますが、年月の経過により慣れると楽観しています。ハワイ住民の人種が全く多様なため、ハワイは米国とは別の独立国みたいな感があり、米国本土からの観光客が外国人に見えてしまいます。この島は不毛の溶岩地帯を除き、頑強に大資本の開発に抵抗し続けて来たため豊かな大自然がたっぷり残されていますが、幸か不幸か若い有能な人達を満足させる仕事が少ないようです。

外地への移住という区切りのゆえに、過去を引きずること無しに現在只今新たな人生を始めつつあるという実感が際だっており、そこに快適な気候が伴ってすっかり若返った気分です。縁あってこのハワイ島の「癒し」のメッカ、カムエラに終の棲家を構えました。人生の悩み苦しみを抱えている人達へ、将来何らかのお役に立てれば、というのが私の念願であり、そのために自分自身を鍛えて行かねばなりません。しかし在家の坐禅でどこまで行き着けるのでしょうか、日暮れて道遠し、と感じます。ただ『随聞記』中のお言葉「霧の中を行けば覚えざるに衣しめる」を固く信じて、自分の身を禅仏教にひたし続けて行くのみです。合掌



パーカー牧場にて

海外レポート／欧州発

オランダ・フランス禅道場レポート

福井市松雲院住職　小　野　義　彦

この旅行は、東京・品川区桐ケ谷寺住職黒田純夫老師(以下、「黒田老師」)から、是非に、とのお言葉があり、随喜させて頂いたものです。ご案内の通り、黒田老師は、長年にわたり、ご実兄の故前角博雄老師(ロサンゼルス禅センター開創)を助け、ご兄弟と連携し、海外布教活動を支援してこられました。そのご縁で、御本尊様をオランダとフランスの、新しい禅道場にそれぞれ寄贈し、それらの開眼法要を行ったものであります。たまたま、旅行中にニューヨークでテロリストによるハイジャック事件が起こり、世情騒然とする中の訪問と相成りました。

まず、オランダの、「禅リバー道場」は、アムステルダム近郊のズータミア(スウィート・レイクの意味）にあり、約百名の会員がいます。堂頭は、前角老師の法嗣マーゼル・玄法老師より嗣法された、オランダ人のコッペンズ・天桂・アントン先生です。五十九歳の、優しく律儀で温かい方で、元アーティストです。遠くはポーランド・イギリス・ドイツからも、会員を集めています。短期間で多くの会員を得た理由として、最近、オランダでは禅に興味を持ち、真面目にこれを求める人が、急増しているからということです。道心を共にする妻の妙法尼と共に、「アンネの日記」の舞台となった隠れ家など、各所を案内して頂きました。

9月13日、法要の日、釈迦牟尼佛、点眼の瞬間、堂内五十名の気は、黒田老師の持つ筆先一点に集中していました。朗々と読まれる法語は、和文に続き英文でも行われ、その説明は、私が読ませて頂きました。そして、玄法老師の法話に先立ち、ニューヨーク惨事犠牲者追悼坐禅を行い、続く小パーティーでは、みんなが口をそろえて、法要に感動したことなどを話してくれました。

ところで、玄法老師は、ヨーロッパに活動基盤を築いて暫くになりますが、最近は、「ビッグマインド」という、二・三日のワークショップを、欧米で行っているそうです。これは、禅の教えを通じて、真の自己に目覚める喜びを体験する、というものだそうです。

次に、フランスの、「ダーナ禅堂」は、パリ郊外の、モントレイ(モントは修道院、レイは小さな、という意味)にあり、約八十名の会員がいます。堂頭は、玄法老師より嗣法された、フランス人のカトリーン・玄応・パジス先生です。玄応尼が購入した、地上四階地下一階、全十数部屋ほどの建物には、禅堂・庫裏・ミーティングルーム・ユーティリティールーム・個室などがあります。朝夕の坐禅のほか、三日から一週間の接心や、子供のためのワークショップなど、様々な行事を行っています。玄応尼は、五十代後半の、元学芸員で、とても誠実でまじめな方で、ダーナ禅堂の名前を褒めると、微笑んでいました。(「ダーナ」は、サンスクリット語で、施し、の意味)

オランダ・アムステルダムの運河

ちなみに、パリのメトロ（地下鉄）の広告に、ZENという文字を見つけたので、玄応尼に尋ねますと、今、パリでZENは、とてもファッショナブルな感覚で受け入れられているそうです。玄応尼には、御本人が以前学芸員をされていた、ロダン美術館をはじめ各所を御案内頂きました。

9月15日、この日も、法要に先立ち、追悼坐禅を行いました。開眼法要の献供には、グラスマン・徹玄老師と玄応先生が導師の脇に立ち、恭しく御佛膳を、これから開眼を行う釈迦牟尼佛・文殊菩薩・普賢菩薩の前にお供えし、その後、黒田老師による開眼が、厳粛な雰囲気の中で行われました。

さて、徹玄老師は、「禅ピースメイカーオーダー」という、禅仏教の理念に基づいた宗教的かつ社会的な活動を展開されています。エイズ患者ホスピス施設、アウシュビッツなど世界各地でのリトリート(坐禅を中心に、祈りを奉げ、自己を顧る修行)、ストリート・リトリート(行乞し、その浄財を喜捨する修行)など、様々な苦境に立ち向かう人々への協力と支援を、物心両面から行っているそうです。

この旅を振り返ってみて、時代が積み重ねられて生まれたオランダそしてフランスの歴史と伝統に素直に感動致しました。ユニークな歴史を持つ国々が、ひしめき合っているヨーロッパを学び、そこに生きる人々を知りたいと思う、知的欲求を刺激される旅でもありました。また、末尾ではありますが、黒田老師はじめ、この旅でお世話頂いた皆様方へ心よりの感謝を申し述べたいと存じます。

今まで、海外で仏教が、ちゃんと理解されているのか、一抹の不安があったのですが、ノートルダム寺院の二つの塔の間隙が、空(くう)を意味していると聞かされ、「あっ!」と、その不安は、霧が晴れるが如く消え去ったのでした。合掌。

ＳＺＩスタッフ研究論文

インターネットを利用した布教の実態調査（2）
----電子メールによるアンケートより----

ＳＺＩ事務局　亀野哲也

調査対象　ホームページを運営しメールアドレスを公開している伝統仏教寺院　３３８件
調査方法　電子メールによるアンケート配信
有効回答　１０４件（３１％）
実施日時　平成１３年９月２４日

アンケート設問

現在運営しているホームページについて質問させていただきます
●宗派をご記入ください（　）　⇒図１
●ホームページを公開したのはいつですか　⇒図２
●ホームページの作成者はどなたでしょうか　（該当に○）　⇒図３
（ ）住職（ ）副住職（ ）家族（ ）檀信徒（ ）その他
●コンピュータ歴はどれ位でしょうか　（ ）年　⇒図４
●インターネットをはじめてから何年になりますか（　）年　⇒図４
●インターネット接続の環境を教えてください（該当に○）　⇒図５
（　)ダイヤルアップ　（　)ISDN　（　)ADSL　（　)CATV　（　)光ファイバー
（　)専用線　（　)PHS　（　)その他→（　　）
●インターネットを月何時間程度利用しますか　（　）時間　⇒図６
●インターネットに関わる費用は幾らですか　⇒図７
ホームページ作成・運営に関わる費用（　　）円/月
プロバイダ料・通信料金の合計　（　　）円/月
●今までインターネットを閲覧・運営してみて、以下の事が受け入れられると思うかを（）内に数字でお答えください。　⇒図８
（１：全く不可能・無効果～５：充分可能・効果的の５段階評価）
（　）お寺、住職を身近にする（　）世界へむけた情報発信
（　）若い世代へのアピール　（　）檀信徒へのアピール
（　）宗派を超えた意志疎通　（　）祈祷、祈願
（　）人生相談　（　）おみくじなどの占い
（　）檀信徒の獲得　（　）バーチャル参拝
（　）ペットの仮想墓地　（　）人間の仮想墓地
（　）実体の無い宗教団体による宗教活動　（　）読経
●インターネットの利点について感じる事をお教え下さい（ご自由に、何文字でも）
●インターネットの欠点について感じる事をお教え下さい（ご自由に、何文字でも）
●ホームページで工夫していることを教えてください

※ここでは、紙面の都合上結果として図８までしか掲載しておりません。
残りの結果および考察については http://teishoin.net をご参照ください。

図６．接続時間 n=95

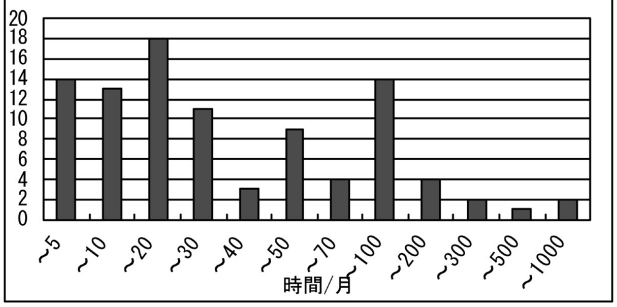


図7. Web運営に関わる費用 n=88

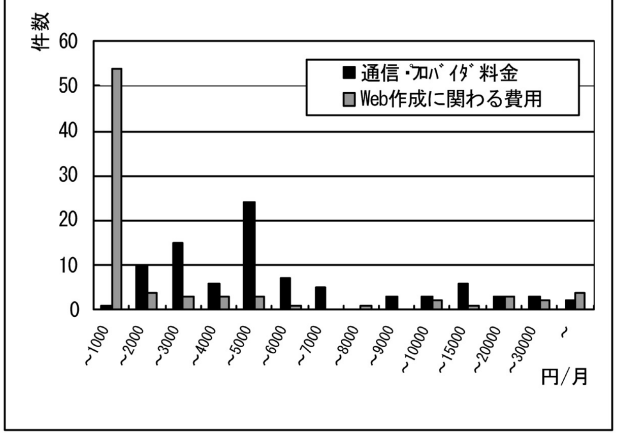


図１．回答者宗派構成比 n=104

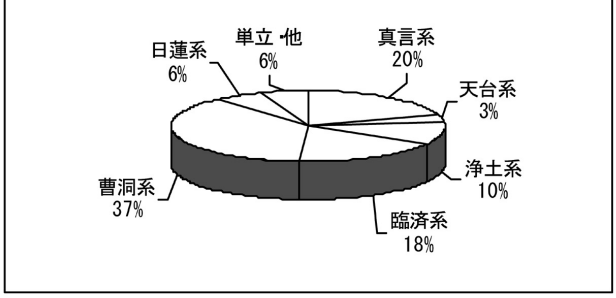


図２．Web公開時期(累積=98

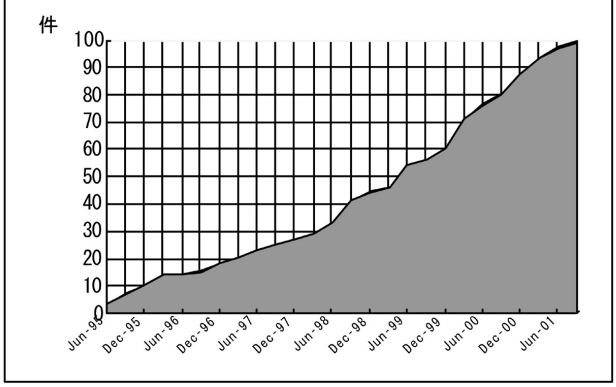


図３．ホームページ作成者 n=99

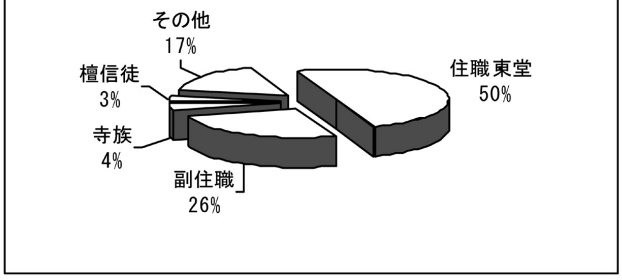


図８．効果についての評価 n

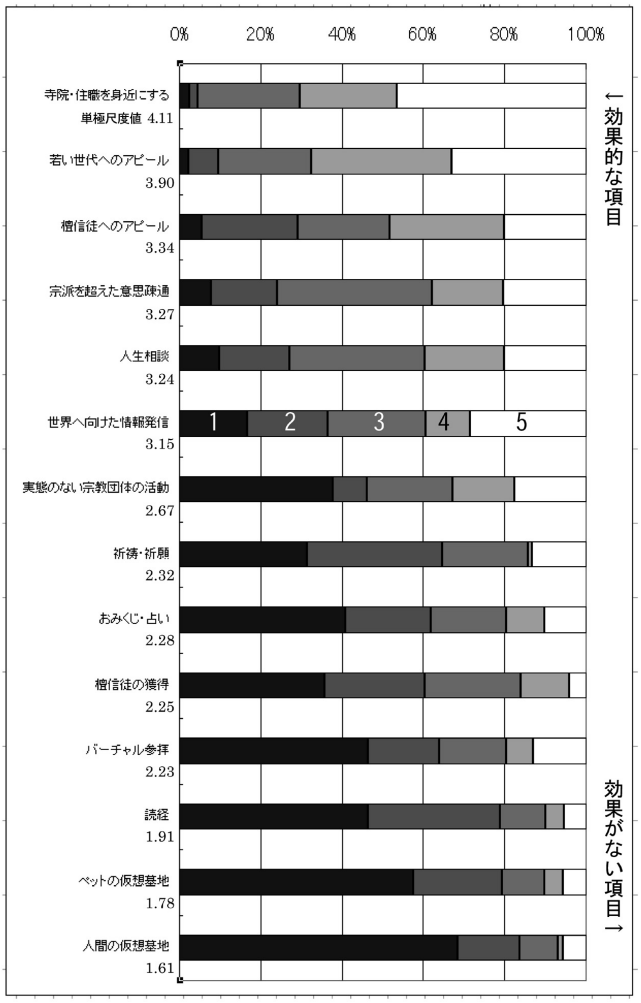


図４．ｺﾝﾋﾟｭｰﾀ・ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ歴 n=96

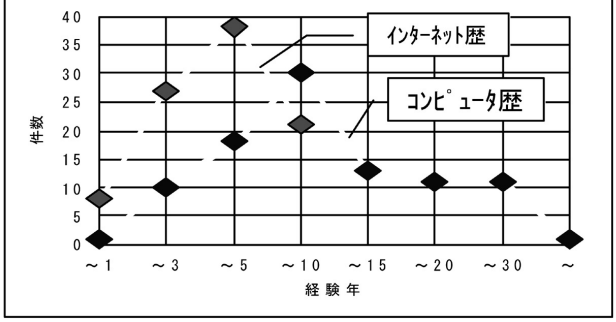
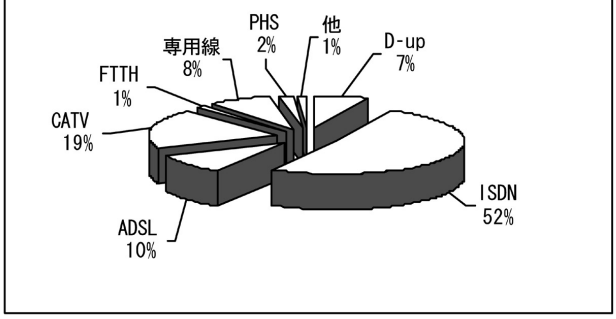


図５．接続環境 n=97



SZIワークショップ「杉原千畝夫人講演会」実践レポート
―人権学習への新たな提案―

ＳＺＩ事務局　秋　央文

１．はじめに

今回、私が所属をするSZIという組織が主催となり、曹洞宗大本山總持寺、鶴見大学からそれぞれ共催と後援を賜り、「杉原千畝夫人講演会」並びに「杉原千畝氏写真パネル展示会」をワークショップとして開催する運びとなった。

拙稿は、このワークショップにより個人的に学び得た所感を通じて、新たな人権学習のあり方の提案を試みるものである。

２．ＳＺＩ概略について

まず「SZIワークショップ」と名の付く以上、そのSZIという組織の概略について触れておきたい。

SZIは1993年に曹洞宗門における海外開教経験のある有志（主に海外開教師OB）を中心に発足した任意団体である。

設立当初は、物心両面における海外開教支援をその活動の目的としていたが、時代の変遷と周囲からの要請により、曹洞宗が掲げる三大スローガン「人権・平和・環境」といった人類共通の課題に対して、国籍や人種という枠組みを超えた意見や提言ができる人材の育成をその活動理念に加えてきた。

その具体的な活動においては、真の布教教化（海外開教を含む）とは、我々宗門僧侶の意識の啓発から始まるという基本理念のもと、前述したスローガンに直結するワークショップの開催、国際化には不可欠である「異文化理解」促進の為の研修会等を企画立案し、自主的な研鑽活動を展開している。

その対象は宗門僧侶のみならず、宗門寺院が抱える檀信徒、社会一般の方々にも裾野を広げ広報活動をしている。

３．杉原千畝氏概略

次に今回のワークショップで取り上げた杉原千畝という人物についても触れておきたい。今回は紙幅の都合上、その人物の詳細については説明を控えるが、氏に関する参考文献と、簡単な年譜を掲載しておくので、参考にして頂ければと思う。

（一）参考文献（著者敬称略）

杉原幸子『六千人の命のビザ』（大正出版・1993年）
杉原幸子・杉原弘樹著『杉原千畝物語』（金の星社・1995年）
杉原幸子監修・渡辺勝正編著『決断・命のビザ』（大正出版・1996年）
渡辺勝正『真相・杉原ビザ』（大正出版・2000年）

（二）杉原千畝氏　年譜

1900年（明治33年）1月1日
　岐阜県加茂郡八百津町にて父・好水、母やつの次男として誕生。
1919年（大正8年）
　同年3月、早稲田大学予科終了。同年７月16日、外務省留学生試験に合格（早稲田大学中退）。同年9月、留学生辞令が出る。同年10月、外務省ロシア語留学生としてハルビンに留学。
1924年（大正13年）
　同年2月、外務省書記生として採用される。以後、満州外交部、モスクワ日本大使館内における要職を歴任。
1939年（昭和14年）
　同年7月、リトアニア領事代理に任命される。
1939年（昭和14年）
　同年9月1日、ドイツ、西ポーランドに侵入。第二次世界大戦勃発。
1940年（昭和15年）
　同年7月、ユダヤ難民が領事館に集結したのを受け、松岡洋右外務大臣（肩書き当時）宛にビザ発給の許可を打診。その翌日にユダヤ難民に大量ビザ発給を開始。
　同年8月、外務省より領事館退去命令。その後、再度電報にてビザ発給を打診。
1945年（昭和20年）
　同年7月、郊外のソ連収容所に入る。
　同年8月15日、第二次世界大戦終結。
1947年（昭和22年）
　日本に帰国。同年6月、外務省を免官。
1985年（昭和60年）
　同年1月、イスラエル政府より「諸国民の中の正義の人賞（ヤド・バシェム賞）」受賞。同年11月、エルサレムの丘で記念植樹祭と顕彰碑の除幕式。その他多数の氏の業績を称える賞を受賞。
1986年（昭和61年）7月31日
　永眠。享年86歳。

4.「杉原千畝夫人講演会」開催趣旨について

本項では、今回の「杉原千畝夫人講演会」における開催趣旨について述べておきたい。次に引用した開催趣旨文は、今回のワークショップにおける企画立案書から抜粋したものである。

〈SZIワークショップ「杉原千畝夫人講演会」開催趣旨文〉

第二次世界大戦中、ナチスドイツからの迫害から行き場を失ったユダヤ人難民に対し、当時の本国政府の意向に反して自らの判断で通過ビザ（査証）を発給し、約六千人のユダヤ人を救った、故杉原千畝元リトアニア領事代理は、「日本のシンドラー」と呼ばれ、1986年に没した後も、その人道主義、博愛精神に満ちた功績は高く評価されている。

この杉原氏の行為は、仏教等の普遍宗教における「慈悲」や、特に大乗仏教や日本の曹洞宗において重要視される「利他行」、「自未得度先度他」の精神等、仏教のエッセンスを凝縮し、具現化したものと表現しても過言でなく、特に、本国の意向に逆らい、ナチスドイツによるホロコーストに反対する形で、ユダヤ人難民を救済した立場には、今日における国際的な課題とも言うべき「人権」的見地、また民族・宗教・文化という枠組みを超えた全人類共通の「平和」に対する願いにおいても、極めて高く評価されるべきものである。

従って、杉原氏の功績を再確認し、そして広く世に顕彰する事は、「人権・平和・環境」を布教教化方針に立て、その細項目の中では「あらゆる差別の撤廃」、「世界平和の実現」を明文化している曹洞宗においては、極めて意義深い事であり、更に、当日の聴衆にも含まれるであろう宗門の未来を担う宗侶の卵や、曹洞宗の海外開

教志望者にとっても貴重な経験となる事であろう。

またその他、仏教徒以外の一般参加者や、外国籍の参加者などに対しては、仏教のエッセンスを、深遠な仏教用語を用いる事なく、かつ感銘的に伝える事が可能であろう。（以上、企画立案書からの抜粋）

今回のワークショップにおける我々の意思とは、まさにこの開催趣旨文に凝縮されるものである。

このワークショップを、「人権・平和」という人類共通の国際的な課題に絡め、ハードにおいては仏教や宗教という枠組みに固執する事なく、しかし、ソフトにおいてはこれらが実は仏教のエッセンス足り得るという事を聴衆の方々に訴えてきた。

この様な教化手法は、仏教に馴染みのない一般の方々にも広く参加を呼びかける事ができ、杉原氏の業績を通して、ご参加頂いた聴衆の方々に「人権・平和」という問題に興味と関心を持って頂く事も可能となる。且つ、仏教の持つ普遍性や社会性に触れて頂く良い機会となる事であろう。「教化」を一つの方便と譬えるならば、今回紹介をした杉原氏の業績を方便として、当日ご参加頂いた聴衆の方々が「人権・平和」というテーマに触れて頂く良い機縁になり得るという事である。

因みにこの開催趣旨文に関しては、更にメッセージとして凝縮をさせ、告知用ポスターやSZI公式サイト（ http://www.soto-zen.net/ ）における告知広告として活用させて頂いた。

5．結びにかえて

今回取り上げた杉原千畝氏の行動は、曹洞宗のみならず、全人類が共通に掲げる「人権・平和」といったテーマにも通じ得るものであり、人道的見地からも高く評価されて当然の偉業でもあろう。杉原氏と半生を共にした幸子夫人の講演会、それに併せて開催したビデオ上映、写真パネル展示会なども、その氏の偉業に敬意を表するものでもあった。

第二次世界大戦中、杉原氏はその高い人権意識から、当時の国が指示した施策に反して、領事館前に殺到したユダヤ人難民に大量のビザを発給した。その氏の「人権」的見地に基づいた英断が、はからずも「平和」に直結し得る行動であった事を今回我々は学べた様な気がする。

確かに、当時の国の意向に逆らった杉原氏の行動に、賛否両論の議論があった事は承知している。しかし今回我々が提起したかった問題というのは、その様な枝葉末節の議論に留まるものではない。

その「人権・平和」といった人類共通の国際課題を、仏教の信仰とは全く関係のない所で実践していた氏の行動とは、まさに我々の手本とすべき所でもあろう。その氏の人道的見地に基づく業績を、我々は時代と空間を超えた今の時代に再確認する事により、改めて人権や平和といった問題に対して、仏教や宗教という枠組みを超えた一人の人間として向き合うべきであろう。

今回ご参加を頂いた方々から、「なぜ、平和を愚弄する戦争という暴挙を、人類は選択せざるを得なかったのか」、また「どうしてナチスは、ユダヤ人を殊更に迫害しなければならなかったのか」という疑問の声を多数お寄せ頂いた。

こうした聴衆の声からも、「なぜ人権が侵される状況が生まれたのか、どうして差別が生まれるのか」という人権意識に各自が目覚めて頂くという当初の目的は、少なからず達成できた様な気がする。

これはまさに今回のワークショップにご参加頂いた方々が、あくまでも自発的に「人権・平和」といったテーマに目覚めて頂き、且つ、興味と関心を示してくれた一つの証でもあると感じる。

実は、そこに私は新しい人権学習のあり方のヒントを見出した様な気がするのである。誤解を恐れずに言うのであれば、ややもすると従来の人権学習では、その主催者側の意思が受講者側にうまく伝わらない場合が稀に見受けられた。例えば人権問題の根幹を揺るがす「差別語」の学習に関しても、本来その言語が被差別者となり得る聞き手側にとって、どの様な意味と機能をもたらすのかを踏まえた上で学習されるべき問題であるのに、ややもすると「言語選択の術」という側面しか強調されず、人権学習が「人権意識の啓発」とは別な次元で一人歩きしている様な危惧さえ感じた。

人権学習における質疑応答において、単純に「言語選択の術」のみを問う質問（現代において使用可能な言葉とそうではない言葉のみを問う質問）が飛び交うのも、その典型的な例なのではないかとも感じていた。

ある種の誤解を招かぬ様に説明を補足するが、ここでは従来の人権学習のスタイルが全く必要ないという事を言っているのではない。それらが稀に主催者側の意思に反して、単なる「言葉狩り」や「言い換えの強要」を誘発する恐れがあるという事を問題にしたいのである。

今回のワークショップにご参加頂いた聴衆の方々が、その我々が意図する所の真意を汲み取り、杉原氏の業績を通して、あくまでも自発的に人権や平和といった問題に目を向けて頂けたのであれば、今回のワークショップはこれ以上ない問題提起にもなり得たと感じる。

時代と空間を超えた今の時代において、同じ様な問題が我々の身の周りに生じた時、杉原氏と同じ様な意識と態度を以て、それぞれが「人権」の尊重に根ざした「平和」的な行動を取って頂ける事を期待して止まない。

その意識を助長させる「問題提起」の積み重ねこそが、私はこれからの人権学習の一つのあり方であっても良い様な気がする。少なくともこの手法は、社会一般の方々を対象に人権学習を催す場合、教化学的にも非常に有効な手段となり得ると感じた。

最後に、今回のワークショップにおいて中心的役割を果たし、多くの資料と情報をご提供頂いた曹洞宗総合研究センター・宗学研究部門所員、並びにSZI事務局員でもある金子宗元師、また師のご夫人でもあり、今回のワークショップにおける告知用ポスター・SZI公式サイト掲載用の告知広告を作成頂いたStudio・Webby 金子裕子氏に、衷心より感謝の意を申し述べ、今回の拙稿の締め括りとさせて頂きたい。

注：『教化研修』46号（曹洞宗総合研究センター 2002年）所収予定

カウンセリングと仏教

SZI事務局　舘　盛　寛　行

1．問題の所在

カウンセリングと仏教に関する研究は、『佛教カウンセリング』として藤田清［1964］にすでにまとめられている。藤田氏は釈尊の生涯、悟りの内容、伝道中の対機説法などから仏教の根本にカウンセリング的活動があることを指摘し、また『中論』『法華経』『維摩経』など大乗仏教の視点からも仏教におけるカウンセリングの在り方を示している。

しかし、30年以上経た現在でも、いまだ「仏教カウンセリング」というものは見いだされていないのが現状である。当然だが、カウンセリングと仏教はその発生にしても、現代に至る経緯にしても根本的な立脚点が異なるのである。カウンセリングという視点は現代社会において重要な視点であり、仏教者が学ぶべき要素も多々存在することは確かである。しかし、カウンセリングがそのまま仏教とはならないということは留意しなければならないと考える。

本論では、第一に仏教者がカウンセリングを学ぶ意味を示し、第二にカウンセリングと仏教の根本的相違点を示す。その上で、カウンセリングと仏教の今後の関わり合いについて考察してみたいと考える。

2．カウンセリングを学ぶ意味

仏教者、特に仏教伝道に携わる人がカウンセリングを学び、実際にその活動に参加するというのは、現代仏教に対する深い反省に基づいている。教主である釈尊の伝道姿勢は、まず人々の苦悩を聴き、それらの苦悩の原因について深く省察することによって、その人に合った適切な教えを説いていた。このような釈尊の伝道姿勢は対機説法といわれ、また、四諦説として仏教の根本教理におかれている。四諦説では第一に苦諦を説き、自己存在が生老病死する存在であることを省察し、それが苦なる存在であることを示している。そして第二の集諦では、その苦の原因として貪欲、瞋恚、愚痴を代表する煩悩を挙げている。そして滅諦・道諦でそれらの苦からの解脱法が説かれるのである。このような視点で自己省察を深めた結果が、仏教で説かれる様々な教理を生み出したのである。また、大乗仏教において菩薩が多くの人々を悟りと安心に導いていく方法として布施・愛語・利行・同事の「四摂法」が説かれ、衆生教化の基本が示されている。

このような仏教の基本的姿勢が示されているにもかかわらず、現代の仏教は儀礼としての葬式・法事が活動の中心となり、また説法を行うにしても壇上からの一方的な話に終始している点が問題とされ、その反省の上にカウンセリングに対する学びの必要性がいわれているのである。

カウンセリングとは「悩みを持った１人の人間を援助すること」であり、その方法としてはロジャーズ［1957］によって発表された「自己一致」「共感的理解」「無条件の肯定的理解」の３条件を基本としており、カウンセラーはクライエントが安心して自己探索をし、自己理解・自己受容を促進していけるように、クライエントとの間に独特の人間関係や心理的風土を形成していく。また、人々の悩みは様々あり、それらを一つ一つ真摯に受け止め、あらゆる視点から援助していこうという姿勢によって、その方法論も様々に発展し、カウンセラーとして身につけるべき基本的理論や技法は多岐にわたっている。日本カウンセリング学会がカウンセラー認定のために挙げているものとしては、①来談者中心カウンセリング、②行動カウンセリング、③精神分析的カウンセリング、④ロゴセラピー、ゲシュタルト療法、体験過程・フォーカシングなどの実存カウンセリング、⑤認知・行動カウンセリング、⑥交流分析、⑦家族療法、集団的アプローチなどのシステム的アプローチ、⑧その他のアプローチとして現実療法、短期療法、森田療法、内観療法、芸術療法、遊戯療法、夢分析、箱庭療法などがある。

このようなカウンセリングの発展から仏教者が学ばなければならないのは、第一に一人一人の苦悩にしっかりと向き合っている点である。仏教教理と現場での活動との差異の問題や、説法において仏教の話が感動をもたらさないという問題は、観念によって作り上げられた教説を知識として一方的な形で説いているからであって、相手の苦悩が不在だからである。相手の苦悩に耳を傾け、相手にとって最も必要な援助を的確に行っていくという態度は仏教者にとって十分に学ばなければならないと考える。第二に相手との関係作りを重視している点である。カウンセリングでは上述した３条件が重要とされ、相手の状態をそのまま受容し、相手と同じ目線で語り合いながら、気持ちを素直に理解していくなかで、信頼関係を築いていく。その上で適切な対応や援助を行うため、その効果が十分に得られるのであるが、仏教者は無条件で尊敬されていると錯覚し、一人一人との関係作りを怠っているため、仏教も伝わらず、また一人の苦悩も救えないのである。カウンセリングで重要視されている関係作りは今後、仏教者も学ぶ必要があると考える。第三に自己理解・自己受容について様々なアプローチの仕方が研究されている点である。仏教でもその歴史において様々な修道論が生み出されており、現代においても十分に機能しているものも多い。しかし、伝統との間で方法論が固定化し、自分自身にとって何が必要なのか、また相手にとって何が必要なのかという反省が行われていないのではと考える。カウンセリングの日々の発展はその反省の繰り返しの上に成り立っていることを仏教者も知るべきではないかと考える。第四に自己理解・自己受容の過程について相手の主体性を重視している点である。カウンセリングでは様々な方法を提示し、相手にあった方法を相手自身に選んでもらう方法をとる。そのため、相手は自分で選んだ方法であるため、主体的かつ積極的に取り組む姿勢が生み出される。しかし、仏教ではある一定の教えや方法があり、それらに自分自身もしくは相手を合わせていくという方法を用いるため、主体性の欠落

の危険がある。教化という視点で見ても主体性の重要性は明らかであるため、カウンセリングの方法などを学ぶ必要があると考える。

本論では現代の仏教者として特に重要であり、必要であると考えられる4点を指摘したが、カウンセリングとは、常に人間と向き合い、互いに悩みながら自己理解を深めていく作業であり、日々の活動が学びの連続であるため、多くの可能性を秘めている。そのため、改めて仏教者はカウンセリングについて目を向けるべきだと考える。

3. カウンセリングと仏教の相違点

対機説法や四諦説、四摂法などの教えから仏教の活動の在り方を反省し、また慈悲や利他の行としてカウンセリングの活動に積極的に携わっている仏教者は多い。このような傾向は現代における仏教伝道の立場からも評価すべきものだと考える。しかし、カウンセリングの活動がそのまま仏教ではないという点にも留意する必要があると考える。

カウンセリングと仏教の共通点とは、人々の苦悩を問題としている点、そして自己理解・自己受容を重視し、その問題に取り組んでいく点である。方法論の違いはあるが、自己を省察し、固定観念や偏見を取り除き、ありのままの自分を受け入れていく。その過程によって不安や恐怖などの苦悩が自ずから取り除かれていくのである。

しかし、カウンセリングと仏教では根本的な相違点が存在する。それは目的の違いである。カウンセリングではあくまで「人間関係を中心とした社会適応」が目的であるが、仏教では生死の問題を中心として、自分自身の生き方、死に方を問い続けることが重要なのである。カウンセリングでは「人間関係を中心とした社会適応」という相対的な問題を取り扱っているため、その答えは相手自身に委ねられ、社会生活の上で支障がなければ、問題の解決と見なされるのである。しかし、仏教では良い家族関係や人間関係を築いても、やりがいのある仕事を得ても、財産を蓄えても、地位や名誉を得ても、いずれ死ななければならないという絶対的な問題を取り扱っており、そこから自分自身とは何か、生きるという意味は何か、どのように生きるべきか、どのような死を迎えるかなどを問うているのである。そのために仏教では指針となる様々な教えがあり、先達がいるのである。

このような相違点を理解した上で、カウンセリングとの共通点や学ぶ意味を考える必要があると考えるのである。

4. カウンセリングと仏教の今後

カウンセリングと仏教には多くの共通点があり、仏教者がカウンセリングにかかわる意味も十分にあると考える。しかし、カウンセリングと仏教とは違うという前提において、それぞれの立場を尊重し、明確な住み分けの必要があるのではないだろうか。今後、臨床心理士やカウンセラーの資格が国家資格となって社会に認知されるようになれば、ますます仏教者にとって活動の範囲が狭められてきてしまうだろう。仏教者としてカウンセラーとは違う何ができるのか、どのような人が対象となるのかを明確に打ち出すことによって、カウンセリングと仏教の双方の理解も深まり、また苦悩している人々の選択肢も明確な形で広がっていくと考えるのである。そのため、第1段階として仏教者がカウンセリングを学ぶ、第2段階として仏教との共通点、相違点を明確に理解する、そして第3段階として仏教者が何ができるのかを明確に打ち出すという過程を経て、はじめて仏教カウンセリングという仏教独自のものが生み出されるのではないだろうか。

参考文献
・藤田清『佛教カウンセリング』（誠信書房、1964年）
・C.ロジャーズ『治療的パーソナリティ変容の必要十分条件』（1957年）
・『カウンセリング辞典』（ミネルヴァ書房、1999年）

注：『教化研修』45号（曹洞宗総合研究センター、2001年3月）所収

嗣法参究序説

SZI事務局　菅　原　研　洲

江戸元禄期に行われた「宗統復古運動」は、その後の嗣法論争の行く末を決定した。幕府の裁可を以て時の宗政家達が方針として示したのは、一連の論争の結果が常に教団としての宗門にとって時機相応であること、であった。したがって、卍山による運動もその顛末は「嗣書」のみ一回きりの授受、「大事」「血脈」は重授可能であったということは、それまでの伽藍相続法と人法一師印証が折衷された形であったということになる。さらに、卍山は学人の悟未悟を時機相応から問うことをせず、嗣法は因縁現成する所に、法の上から認めるべきだという説（『洞門衣袰集』）に立つ。卍山と同時代の梅峰、やや下って面山・万仞らも、悟未悟をしばらく置いて、学人の個々性を法の絶対平等性から見る何らかの時機相応説に立つ。そして、江戸元禄期から三百年ほどを経た現代の嗣法観も、内容的には卍・面系統の嗣法観が、時機相応説として賛嘆され、そのまま受け継がれている。

高祖道元禅師は、その嗣法観が時機に関わるものではあるが、むしろ時機超越とされるべきである。「而今の生命」における体験的正法は、時機の有り様を世俗的なそれと本質的に転換されている。嗣法の現場として禅門に語り継がれている「拈華微笑」「嵩山得髄」「黄梅伝衣」等は、学人の不染汚の修証から見られた一法究尽にこそ回互同参する。たとえば、『修証義』第五章の末尾に引用されている、『眼蔵』「即心是仏」巻の一節は釈尊との同参を良く示す、いわゆるの行持道環である。

具体的実践の行持には時機がないのではないが、一時・一所の行仏が三世と冥合し十方と円融相即する事を道元禅師は強調される。そこから展開して、純粋な歴史上ではたった一回きりであるはずの、単独的な嗣法の現場が学人の行持に同参として現成する。世間では様々な「予定」によって未来が組み上げられているように見え、過去は様々な「追憶」や「反省」に見出そうとする。これらによって世間では過去・現在・未来に亘る通時的、かつ線形的な時間を見ているが、宗乗ではむしろ一法究尽による共時的、かつ非線形的な「而今」現成の時間であり、共時的な奥行きを持った構造的時間に修証一等という独自の宗乗が展開することになる。

例えば、嗣法の現場として「拈華微笑」の故事が最も顕著であるが、これは宗義的要請によって徐々に組み上げられていったフィクションである。しかしそれが公案として学人の前に提示されたその時には、既にそのフィクション性は意味をなさない。学人はこの「拈華微笑」の故事を実際に展開する問題として、同位同時に、または異位異時に比較論ぜざる絶対的一法の古則公案として取り組むのである。したがって、その修行に同参として展開・究明される「拈華微笑」の故事は而今に現成せざるを得ない。

ところで、昨今その学問的な議論が著しい如浄禅師が道元禅師と初相見した「面授」は、道元禅師本人が何時「身心脱落」をしたかどうかという事を示していない（「身心脱落」話そのものは『永平広録』「巻二－１３６」上堂がそれを肯定、または歴史家たちの思想的背景になったのだろう。問題は伝統的にそれが受け伝えられたということだ）、その意図があまり顧みられることなく議論が続いたが、身心脱落から仏法保任へと話が展開し、かつ嗣法・伝法をも初相見に一緒くたにしようとする議論もあった事を記憶している。

私見であるが、おそらく初相見の「面授」とは、師である如浄禅師の持つ場所に弟子である道元禅師を導いたものであったとできよう。経豪による『御抄』には初相見時には如浄禅師から言葉が語られたことを指摘している。要するに現代宗学では余り顧みられることがないのだが、ここには「師資」間による「機」の遣り取りが示されている。

身心の脱落、つまり、身心への妄想・執着を離れることは存在論的な対象としてのそれらを単純に否定するのではない（そうするとそれを否定する主体としての「自己」を新たに設定しなければならない）が、身心の否定は必ず成される。いわば自己否定の自覚とも言うべきこの事象は、積極的には非自己の仏向上（本来自己は無常を媒介にして非自己的に現成しており、それをそのまま肯うこと（たとえば「仏性」巻の「無常は仏性なり」に対する「信」として）は、本来仏が仏として行ずること＝行仏である）とでも言うべきである。また、消極的には自己が師に蔵身（＝随身）している（させられている）とするべきであって、消極的な「段階」でも、確かに仏法は究尽されているという主張が成されるのは肯けないわけではない。

しかし、この消極的仏法はあくまでも、仏祖の功徳としておおよそ本覚等を現成せしむる如浄禅師から見られたものであり、道元禅師という学人は、未だ師の世界で輪廻（連歌的用法）している。学人は「随身＝師の生き方」を学ぶ（まねぶ）ところから始まり、随身の境涯を突き抜けてしまわねばならない。いわば、行的な自己否定としての随身を通した「上」で本来仏としての自己同一性に生きることである。

その「時」に同一性を保任する自己とは、既に日常的なそれとは同一にして差異の「人・時・処」統一者、つまり、而今としての現成であり、日常的自己を含めた全一的事象を世界そのものに投げ入れ、時時刹刹に新たなる世界を創造的創造していく存在であり、「日日の生命を等閑にせず、わたくしに、つひやさざらんと、行持する」（「行持（下）」）自己である。

歴史が過去と現在の対話であるならば、歴史的な事実を改変しつつ、その改変が宗義的要請に基づくものであった「拈華微笑」説が成立し、徐々に宗義に於いてその地位を獲得しながら、道元禅師に至り全く地位が逆転してしまうことは、どのように解決されるべきか。「拈華微笑」説等の初相見時の如浄禅師の説示が、釈尊が迦葉仏に「まのあたり」授けられた釈尊以前としての面授の道理をもって摩訶迦葉に説示したもの、を再現するのであれば、（順序が逆であるが）「嗣書」巻をも見なければならない。如浄禅師の「嗣法の説示」において、道元禅師が本来全く教学的な内容を持つ知識として把握していた（これ自体が一つの古則公案的なのではあるが）「過去七仏」は、如浄禅師の説示によって、古則としての知識的な性格から、「従来の旧窠をも脱落」（「嗣書」巻）することを通して、つまり古則としての知識性そのものが投げ入れられた、而今としての「現－成」公案となる。そこで構成される世界は「まのあたり」の事実として、自ずから連関的全体へ開放された生命的世界であり、主宰者としての道元禅師による、如浄禅師の世界からの輪廻（連歌的用法）から抜け出た、自己否定の上での自己同一的世界の現成となるのである。その世界的全体の現成においては、もはや「多子塔前」における「金襴衣」に「正法」を仮託するのは、勝義としては肯うことができるが、「金襴衣」という一事象に結節し過ぎてはいないだろうか。したがって、「吾有正法眼蔵涅槃妙心、附属摩訶迦葉」は勝劣一等としての宗義開展の素地に契う。それは「而今の生命」における体験的正法とは、単純な概念的・要素的な還元を行うことのできない複雑さを示すからであり、「正法を嗣ぐ＝嗣法」は世界の複雑さに依り、「師資証契即通」という「感－応」「道－交」の開かれた世界に於いてあるのである。

「而今」における嗣法の説明としてだが、而今とは刹那に還元された「絶対の今」ではない。かつ、通時的な過去・現在・未来という時間経過でもない。「而今」とは「過去・現在・未来という分節的時間を否定しつつ時間そのものとして流れつつある絶対の今」と矛盾的に言われるべきである。特定のイベントとしての初相見、あるいは大悟徹底、「嗣書」の授受を嗣法としてしまいがちだが、それらは過去の或る時の事実でありながら、自己の事実そのものとして抛って（単純な否定ではなくて「脱落」）、自己同一的世界の創造的創造を続ける現

成に多様性を添えるのである。

最後に、あるいは連続した修行を一つの系とし、特定時間のイベントとしての伝法儀規を一つの系とし、それらそのものを投じた複雑な系を「嗣法」として参究し・保任する可能性を開くことはできないだろうか。要するに「ならべるにあらずつらなるにあらざ」る「倶時」（「面授」巻から取意）における「仏祖の仏祖を参究し、仏祖の仏祖を証契する」（「葛藤」巻）ことをもって「嗣－法」として「而今現成」するということである。

そこまで至れば、もはや近代科学の知がそのままの形で通用することはなく、「凡夫の知見をもってあそびて、仏心もかくあらんずるとあやまりて、能知・所知の知を論じ」（「別輯仏向上事」巻）る事をせずに、自己否定の上での環境に於いてある主観による創造的創造へ自己の知解身心を行の展開によって投じつつ、環境としての「覚－前」に証せられる仏から仏として而今現成することになる（あるいはこれが「行仏」）であろう。この現成において、私の嗣法参究はようやく開かれる。

〈註記略〉

大本山永平寺主催

第２回夏期大学講座「禅といま」開催

ＳＺＩ事務局　浅　井　宣　亮

去る2001年8月30日～9月1日にわたり、第２回夏期大学講座「禅といま」が曹洞宗檀信徒会館において開催されました。高祖道元禅師750回大遠忌記念事業の一環として企画され、朝日新聞社の後援を得、一般公開講座として曹洞宗の檀信徒はもとより広く社会に向け「禅」に触れていただける機会を提供しようと企画されたものです。当SZIは、主に人的な協力をさせていただきました。

同じ趣旨で2000年7月下旬に、同会場で第１回夏期大学講座「禅といま」が開催したところ盛況であり、抽選に漏れ受講できなかった方々も多数見られました。「毎年開催して欲しい」という声も多かったため、今回第２回夏期大学講座が企画されました。前回同様、今回も会場の収容人数の都合上受講者を300名に限定する必要がありました。また今回は講義終了後に坐禅体験の時間を設けたところ、希望者多数のため、やはりお断りしなければなりませんでした。そして、夏期大学受講者に対して"「禅といま」永平寺への旅（2001年11月19日～21日）"への参加を募ったところ60名もの応募がありました。

今回の講座の特徴は、午前中の講座を高崎直道先生（鶴見大学学長）、東隆眞先生（駒澤女子大学学長）、廣瀬良弘先生（駒澤大学教授）による〝禅への学術的なアプローチ〟とし、午後の講座を松原泰道先生（南無の会会長）、青山俊董先生（愛知専門尼僧堂堂長）、小倉玄照先生（元永平寺講師）による〝禅を実践する立場からの法話〟とし、午前と午後で講座の内容に変化をつけたことでした。講座の対象者が曖昧になるという指摘もありましたが、総じて「普段は聞かないような話が聞け、禅に対する興味が広がった。」という意見が多数を占めたようです。

また、受講者のほぼ全員が第３回の開催を希望し、夏期大学が継続事業になって欲しい、という意見でした。ある参加者からは「こういう機会を提供することは、曹洞宗の義務ではないのか」というご指摘も頂きました。私自身、お手伝いさせていただき、一般の方々の禅に対する関心の高さに驚かされました。そして、今後も夏期大学に対してできるだけの協力をしていきたいと思うと同時に、SZIも主体的にこのような企画を打ち出さなければいけないと感じさせられました。

ＳＺＩ動静報告

2001年3月1日より11月30日まで

３月７日　大本山總持寺　ワークショップ打ち合わせ
３月23日　故杉原千畝写真パネル展打ち合わせ　鶴見大学会館
４月11日　役員会　曹洞宗檀信徒会館
４月26日　遠忌局会議　ＨＰ下請最終打ち合わせ
４月29日　会報19号発送
５月６日　大遠忌協働事業告知ＨＰ立上
５月28日　大本山總持寺・鶴見大学　ワークショップ打ち合わせ　ポスター貼付等告知活動開始
６月25日～26日　故杉原千畝写真パネル展　鶴見大学
６月30日　大本山總持寺ワークショップ　大本山總持寺
７月11日　事務局会
８月30日～9月1日　夏期大学講座「禅といま」への協力　曹洞宗檀信徒会館（永平寺主催）
９月５日　役員会　新宿　東長寺
９月６日　ＳＺＩ短信発送
９月26日～10月８日　「アジア子ども文化祭」、「アジア仏教徒フォーラム」への協力　仙台・名古屋（永平寺主催）
10月31日　教化学大会への発表
11月９日　会報編集会議　駒沢
11月18日　ゆめ観音準備（大船商店街廻り）
11月19日～23日　ゆめ観音舞台設営・役所廻り（大船観音・警察・役所）
11月24日　ゆめ観音 in 大船
11月27日　役員会・編集会議

常時インターネットで事務局会等の連絡
広報活動をしております。

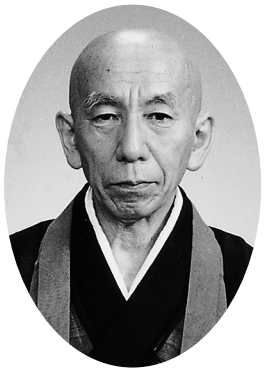
会費納入者名簿

ＳＺＩ会費納入者

新規会員並びに会員ご継続
ありがとうございました。
（敬称略・順不同）
2001年２月１日～2001年11月30日まで

青木俊享	太田市	岩松寺
赤間直道	仙台市	龍角寺
秋央文	世田谷区	
秋田弘隆	静岡市	法幢寺
阿部光寿	福島市	常円寺
天野宏雄	加美郡	皆伝寺
荒井禮一	深谷市	昌福寺
原江寺	徳山市	原江寺
石井和泉	大田原市	玄性寺
石井清純	市川市	
石井早苗	入間郡	正覚寺
石川和幸	市川市	
石塚正道	飯能市	見光寺
石田了丁	東頸城郡	宝台寺
磯貝昌隆	文京区	喜運寺
市川明雄	府中市	観音寺
伊藤仁志	安房郡	瑞岩寺
伊藤禅龍	松前郡	法徳寺
伊藤道人	平鹿郡	満福寺
糸柳格順	藤枝市	洞雲寺
乾宗俊	小田原	宗久寺
猪俣正孝	浜北市	高林寺
岩本昭典	文京区	吉祥寺
岩本英男	横浜市	
上村映雄	中野区	保善寺
鵜飼宏史	一宮市	禅林寺
宇田照彦	八王子市	東照寺
永心寺	新宿区	
江口みさ江	江南市	
オーシャントラベル	豊島区	
大洲久典	名古屋市	大黒寺
太田宏見	弘前市	宝積院
太田賢孝	新宿区	大龍寺内
大谷哲夫	新宿区	長泰寺
大西泰信	大沼郡	正法寺
大場満洋	大宮市	
大場堅司	品川区	
大森篤史	上尾市	東栄寺
大八木春邦	鶴岡市	保春寺
大山陽堂	富津市	海竜寺
小笠原隆元	松本市	広沢寺
岡島博司	豊田市	永沢寺
岡野定丸	福島市	盛林寺
岡本荘一	中野区	龍昌寺
柿沼仁法	行田市	龍泉寺
加藤孝正	富士市	永明寺
金田諦典	栗原郡	通大寺
加納博人	西加茂郡	天徳寺
亀野哲也	横浜市	貞昌院
川橋範子	豊田市	
菊泉寺	名古屋市	
岸世一	熊谷市	東竹院
岸本孝道	小浜市	空印寺
北浦孝雄	加古川市	昌福寺
木谷雅樹	渋谷区	瑞圓寺
北野良昭	高島郡	正伝寺
木村誠治	柏市	大洞院
楠俊道	耶麻郡	長照寺
来馬規雄	豊島区	高岩寺
黒川浩治	板橋区	
黒木靖	江戸川区	
黒田俊雄	大田原市	光真寺
黒田征利	鹿沼市	瑞光寺
黒田泰弘	大田原市	
黒柳博仁	長野市	天周院
月宗寺	山本郡	
玄光庵	仙台市	
小泉悟道	川口市	円通寺
香林寺	東松山	
穀蔵禅戒	天塩郡	清輪寺
小島孝尋	本吉郡	大雄寺
児玉重夫	千葉市	宗胤寺
佐久間顕一	京都市	
佐瀬道淳	安来市	松源寺
佐藤昭次郎	新宿区	
佐藤黙童	西多摩郡	周慶院
佐藤陸雄	一関市	長安寺
佐藤信嗣	印旛郡	
宍戸由布子	西白河郡	善通寺内
篠田一法	名古屋市	長松院
篠原鋭一	香取郡	長寿院
柴田弘一	秋田市	東泉寺
柴田隆全	名古屋市	神蔵寺
珠泉院	足柄上郡	
俊朝寺	港区	
昌雲寺	伊勢崎市	
正観寺	横浜市	
乗福寺	秋田市	
神野哲州	名古屋市	地蔵寺
神龍寺	豊田市	
瑞雲院	矢板市	
随流院	横浜市	
栖川隆道	大阪市	妙壽寺
杉山宗和	男鹿市	龍門寺内
寿松木宏毅	平鹿郡	永泉寺
鈴木道雄	南秋田郡	自性院
鈴木豊子	中野区	
鈴木包一	焼津市	林叟院
関光禅	八千代市	観音寺
石夢工房	港区	
高田憲道	東海市	宝珠寺
高橋秀雄	北埼玉郡	広徳寺
高橋政興	港区	保安寺
舘盛寛行	相模原市	梅宗寺内
田中哲彦	広島市	聖光寺
田中芳周	杉並区	観泉寺
田中良昭	港区	
田宮黎友	新潟市	興源寺
田村優子	岩手郡	宝積寺
長年寺	群馬郡	
土居孝童	喜多郡	瑞林寺
鶴田悦章	額田郡	本光寺
東栄寺	松山市	
洞外文隆	三浦市	本瑞寺
東昌寺	比企郡	
尖秀雄	足柄下郡	吉祥院
戸田規子	安城市	慈光院内
栃掘真英・久子	平塚市	浄心寺
飛田正道	加茂市	法音寺
冨井清孝	十日町市	祇園寺
鳥澤俊寛	秦野市	泉秋寺
永井康允	宝飯郡	東漸寺
仲井章史	板橋区	増福寺
長尾龍心	野付郡	長福寺
中村見自	倉吉市	大岳院
中村覚道	北松浦郡	洞禅寺
奈良康明	台東区	法清寺
楢崎通元	新居浜市	瑞応寺
成田大航	福知山市	円覚寺
西沢応人	豊島区	祥雲寺
西沢宏道	新宿区	宗参寺
野口弘龍	台東区	福壽院
橋本徳倫	滑川市	徳城寺
蓮池泰乗	鶴岡市	宗伝寺
長谷川崇信	西白河郡	常在院
秦慧孝	杉並区	寶昌寺
籏本宏昌	豊島区	泰宗寺
葉貫成吾	安達郡	石雲寺内
馬場義実	横浜市	倫勝寺
原田道一	大野郡	正宗寺
日比野道英	岡崎市	渭信寺
平子興正	安中市	桂昌寺
廣田賢也	行田市	嶺雲寺
福島伸悦	行田市	興徳寺
福島ＢＳ観光	郡山市	
福嶋幸隆	杉並区	長泉寺
福壽院	千葉市	
福田恵文	台東区	東禅寺
藤井和彦	新宿区	竜門寺
藤川享胤	鶴岡市	般若寺
藤木総宣	川崎市	
宝持寺	鴻巣市	
北条正興	西茨城郡	龍泉院
細川正善	耶麻郡	天徳寺
細川皓代	京都市	宗仙寺
堀部明宏	名古屋市	曹流寺
松本誠諦	富山市	自得寺
松本力也	千葉市	海蔵寺
満友寺	大曲市	
水町宗典	佐世保市	青眼寺
皆川広義	鹿沼市	常真寺
峯岸正典	甘楽郡	長楽寺
宮崎輝郎	北高来郡	和銅寺
宮澤俊弘	松本市	正麟寺
宮田春光	名古屋市	春江院
棟方清允	大曲市	大川寺
村上泰賢	群馬郡	東善寺
村上直文	美唄市	禅昌寺
森嶺雄	所沢市	松林寺
森田英仁	千葉市	
安野正樹	羽生市	建福寺
山喜光明	川口市	金剛寺
山口義博	黒石市	保福寺
山口淳一	新田郡	（有）オモロ
山崎季晟	三島市	宗徳院
山田栄一	日立市	鏡徳寺
山本健善	世田谷区	
山本文子	武蔵野市	
横山敏明	横浜市	西有寺
吉岡棟憲	福島市	円通寺
竜華院	沼田市	
渡辺孝彦	足柄上郡	種徳寺
渡辺紫山	山本郡	松庵寺
河村光司	世田谷区	駒沢大学高等学校
松永寛道	清水市	海岸寺
斉藤勇雄	東田川郡	永鷲寺
宮崎拡行	東田川郡	延命寺
佐村隆英	飯能市	
伊達愛	三鷹市	
櫻井孝順	天竜市	栄林寺
大船観音寺	鎌倉市	
長禅寺	本荘市	
佐藤孝子	東田川郡	
難波真一	鶴岡市	
成安寺	富士市	
菅原敬洲	栗原郡	城国寺
永源寺	富士市	
北野晴信	北区	長福寺
洞雲院	知多郡	
黙仙寺	鎌倉市	
谷崎無奏	藤沢市	長福寺
中央寺	札幌市	
伝心院	富士市	
小出忠孝	日進市	愛知学院大学学長
新潟専門尼僧堂	北魚沼郡	
石田征史	横浜市	永明寺
善谷寺	茅ケ崎市	
飯島誠之	駿東郡	秀源寺
東隆眞	稲城市	駒澤学園学長
松月院	板橋区	
先照寺	富士宮市	
大法良典	西置賜郡	盤昌寺
宗清寺	新宿区	
村上和光	天草郡	芳證寺
落合正道	鶴岡市	田種寺

SZI総会・講演会のお知らせ



講師　楢崎通元老師

2002年度SOTO禅インターナショナル総会を下記の通り開催するはこびとなりました。講演会には瑞応寺堂長 楢崎通元老師を講師にお迎えして「慕古の慶快」に学ぶと題しましてお話し頂く予定になっております。

時節柄何かとご多端のことと存じますが、万障お繰り合せの上ご出席賜りますようご案内申し上げます。　　合　掌

— 記 —

日　　時　　２００２年２月１３日（水・友引）
午後１時３０分　受付開始
会　　場　　曹洞宗檀信徒会館（東京グランドホテル）３階「菊の間」
会　　費　　無　料
ただし懇親会参加者は会費５,０００円です（学生は３,０００円）
日　　程　　午後２：００　開教師示寂者追悼会
２：２０　ＳＺＩ総会
３：００　高祖道元禅師750回大遠忌記念講演会
（どなたでも参加できます）
講師　瑞応寺　堂長楢崎通元老師
演題　「慕古の慶快」に学ぶ
質疑応答
５：００　懇親会　　以　上

講演会参加希望者は、ＳＺＩ事務局（03-3361-0614）までお申し込みください。

■ＳＺＩ特別寄付者

ご寄付ありがとうございました。
（敬称略・順不同）
2001年２月１日～2001年11月30日まで

小島孝尋	宮城県	大雄寺
江口みさ江	江南市	
佐藤昭次郎	新宿区	
篠田一法	名古屋市	長松院
石田征史	横浜市	永明寺
佐瀬道淳	安来市	松源寺
浅田正充	茅ヶ崎市	善谷寺
永心寺	新宿区	
小笠原隆元	松本市	広沢寺
福嶋幸隆	杉並区	長泉寺
洞外文隆	三浦市	本瑞寺
鈴木包一	焼津市	林叟院

■助成金
ありがとうございました

大本山永平寺様　大本山總持寺様

皆様のホームページ運営中!

SZIホームページでは、活動報告の他、皆様との交流の場を設けています。
SZI.BBS（掲示板）へのご意見・ご質問をスタッフ一同お待ち申し上げます。

http://www.pa.airnet.ne.jp/szi/